

# Origami Tanteidan Newsletter 折紙探偵団新聞

50号  
記念増大号

## 第二回「折りゴミ製造元」

### ■折りゴミという認識■

かつては家族から「ゴミ製造元」などと呼ばれ、研究・分解用にとっておいた作品を知らない間に捨てられてしまったりといった感じだったのに、「をる」などに作品を掲載していただくようになってから、ちょっとした試作品（作者本人がゴミと思っているようなもの）まで透明ケースに飾っておかれたりするようになっていく。私の折紙作品に対する家族の扱いが180度変わった。…ような気がしていたので、このあいだその点をよくよく聞いてみたら、「全然変わってない」とのこと。昔からこんなに大切にされてたわけ？と問うたら「昔からゴミ扱いのままだよ」と言われ愕然とした…。

紙という素材自体、とても弱々しいものという印象が満ち満ちて

いる。折り紙という方法自体も、そのおもしろさを知らない社会一般では、たいした作品をつくりだせる方法とは認識されていない。「所詮は折り紙」だ。かく言う自分の中でも、こうして折り紙という方法を軽んじ馬鹿にする捉え方がなきにしもあらずだった。なんとかして世間からゴミ扱いされない「スゴイもの」をつくろうと、さまざまな技法・方針を試していた時期がしばらく続いたと思う。しかしこれらの中には、彫刻や塑造に於いて魅力を発揮すると思われる技術を無理矢理取り込もうとしたために、「『折り紙で』こんな複雑なものをつくったからスゴイ」ということ以上の存在意義を感じとれないものも多数あった。「折り紙」そのものとして楽しんでいなかったのだろう。



ちょっと複雑になるだけでも紙の重なりと折り線（折りひだ）が多く出てきてしまうので、これらの整理・デザイン処理が必須となる。これらを負担と捉えず、逆に作品構成要素として利用してしまうということは、「自分が折り紙という方法から感じとれるようになったカッコイイ要素」のうちのひとつである（手前味噌で恐縮だが、拙作「弥勒菩薩半跏思惟像」の髪周辺などを見ていただきたい。ひだが重なっている部分をほんのちょっとずらして反りをつけただけなのだが、単に「髪」を表現したということ以上の存在感を持っているように見えるのは、作者の欲目だろうか。こういう造形方針の作品はこれまでもあっただろうけれど、自分でやってみた作品

### ■最近カッコイイと思うこと■

本当に心の底から「折り紙という方法って、それ自体、結構カッコイイ作品を作り出せる方法じゃないか」と思えるようになってきたのはつい最近のことかもしれない。折り紙という方法でできそうもないことを成し遂げることに意義を見出すのではなく、折り紙の工程で自然に、当たり前前にたびたびでてくる形状に魅力を感じるという捉え方へと、作品ではなく自分のほうが変わってきてしまった（「折り紙特有の形状をめざす」などという表現を使うと、排他的な、自分の方針を押しつけるようなイメージがあるのでそうは言いたくないのだが）。筆者の場合は、不切正方形一枚折りに多くかかわることで、このことに対する自分なりの解答をいくつか得たと思う。

例えば、不切一枚折り作品では、

ということで説明しやすかったのを出した。また、故・吉野一生氏による「虎」の頭部のように、紙面内部から出てきたカドの有効利用ということにも興味があり、最近のいくつかの人物造形では顔のパーツを内部から取り出すことを試みている（弥勒菩薩もそのひとつ。用紙の中心は髻のあたり）。以前は「ふ厚くて扱いにくい」としか思わなかったが、表面積が大きいので厚みをうまく分散しさえすればさまざまな加工を施すことができる「なかなか使える」部品だということが実感できるようになった。「蛇腹折り」も、カドを出すだけでなく、作品表面で主張する模様パーツと考えるとまた違った魅力をもっていることがわかる。さらに、「折り紙という方法は立体を表現するのに適している」という観点から、筆者が「空間作品」と呼んでいる分野（もともとは平面だった材料の干渉によってつくり出された隙間・空間を、積極的に作品構成要素として活用した作品）についても書く予定である。

「作品の内包する強烈な、ことばや理論にあらわす以前の衝撃・印象が一瞬にして鑑賞者の皮膚からしみこんでしまっているような作品」がつくりたかった。それが、自分にとって「ゴミでない」ということだったのだと思う。作品をそうしたものにするために最近試みている上記のような技法について、次回からひとつひとつ論じてみたい。

折り紙  
という  
方法 北條高史



# とこが折紙時評やねん

前川 淳

まえかわ じゅん Jun Maekawa

■父がオリヅランをくれました。  
垂れ下がる株を折り鶴に見立てた命名だそうです。

第10回  
アンドロイドは紙の  
羊の角を折るか？

手塚治虫さんの「火の鳥・復活編」に、人間の記憶を受け継いだロビタというロボットが登場する。以前もこの「探偵団新聞」に書いたことがあるが、手塚さんは、それを演出するエピソードのひとつとして、ロビタが折り鶴を折るシーンを描いている。さすがに味のある演出だが、ロビタはアンドロイド(人間型)ではなく、業務用の掃除機というか、いかにもロボット然としたロボットで、手の構造も、三日月型の金属がふたつ合わさった、絵に描いたような(絵に描いてあるのだけれど)「ロボットの手」をしている。あのような手で果たして折り鶴は折れるのだろうか？わたしは以前からそれを疑問に思っていた。

そもそも、折り鶴を折ることは、ロボット技術にとってどれほど難しいことなのだろうか？現状の技術で折り鶴を折るロボットは可能なのだろうか？それが可能となれば、千羽鶴の大量生産も可能になる。そんなもの大量生産してどーするんだという疑問はもっともだが、ユニット折り紙のパーツを大量生産してくれると、少しはうれしいかもしれない……。

21世紀を間近に控える今日、ロボット技術はいったいどのようなになっているのか？！今回はこの疑問に答える！！

我々の身近に、その名も「自動紙折機」なる機械が普及していることは、案外知られていない。自動紙折機。折り紙愛好家の空想をそそる名称である。折り鶴ぐらい簡単に折ってくれそう。しかし、落ち着いて考えれば(落ち着いて考えなくても?)想像できるように、実体はそのようなものではない。街の印刷屋さんや新聞販売店に設置されている、紙を二つ折りや四つ折りにする機械、それが「自動紙折機」である。「探偵団新聞」の作成にも使われているはずだ。なかなか働き者だが、折り鶴は折ってくれない。ヤッコさんも

折ってくれなければ、カブトも折ってくれない。紙飛行機も折ってくれないし、宝船も折ってくれない。(しつこいな)「自動紙折機君。君は折り鶴を折りたいと思ったことはないのか。」

ホリゾン工業  
自動紙折機 AL-49



答えはない。どうやら、折りたいと思ったことはなさそうである。「斜めの折り目なんか折るもんかい」といったところかもしれない。

ティッシュペーパーの工場などでは、さらに複雑な紙の折り畳みが、オートメーションで行われている。しかし、その折り畳み方に「中割り折り」や「沈め折り」はない。ましてや、「矢印の部分を引き出し、白丸の部分の破かないようにしながら、星印のカドを押し込むように折って、全体を図のように整える」といったことはできない。できるわけがない。そんなことができたなら、そのロボットに、日本折紙協会の「初級折紙講師」を認定しなければならない。一方、このことを逆に考えれば、ジョン・スミスさん考案の「ピュアランド・モデル」(正方形から始め、山折りと谷折りだけを使用するシンプルな作品群。「をる」16号で紹介)のような作品であれば、ロボットにそれを教えることはできると言えることになる。紙ナプキンの「三角畳み」をひとつの折り紙作品と見れば、それを折る機械(ロボット)は既に存在しているわけだ。折り鶴も、折り目を型押しして一気に基本形までまとめるといった方法を使えば、専用の機械を製作することは可能であろう。開発コストは五千万円ぐらいか？千羽鶴を百万束ぐらいつくれば元が

とれる？……うーん、無意味な計算だ。

このような専用機械ではなく、人間の手を真似た「ロボットの手」で折り鶴を折ることは可能だろうか。これが次の疑問である。大学時代の友人が本田技研でロボットの研究をしているので、彼にこのことを訊いてみた。彼はどちらかということ「歩行」が専門なのだが、次のように答えてくれた。

「今のロボットの技術では、たとえば、机の上に重ねて置いてある紙を、一枚だけつまみあげる、なんてことでさえ(確実には)できないと思う」あらら、そうなのか。紙をつまみ上げられなければ、折り鶴は折れないぞ。人間の一歳児ぐらいの運動能力だな。「手(指)の自由度はとても高く、これとそっくりのものをつくろうとしても、なかなかうまくできません。…略…指先の感覚(センサー)も大切です。…略…さらに、目の機能も必要です。私は、目を瞑って、折り鶴折れる自信はありません。」

なるほどねえ。そう言えば、95年の第1回折紙探偵団コンベンションの懇親会でも、「目隠し折り」がゲームになっていた。わたし自身は目をつぶってでも折り鶴は折れるし、折り紙界の伝統芸(?)である「背中に手を回して折り鶴を折る」もできる。さらには、全盲の折り紙作家・加瀬三郎さんのようなひとにもいるし、目の見えないひとにも大いに折り紙を楽しんでいる。ただ、「目で見ること」を映像情報のフィードバックによる空間座標の測定(もったいぶった表現でゴメン)と考えれば、それが「手のセンサー」の一部である面もたしかにある。また、視覚情報を抜きにしても、「手は露出した脳である」との言い方もあり、その動きは単純に運動能力だけではとらえきれない。

というわけで、ロボットが折り紙を折るのは難しそうである。少なくとも、折り紙でロボットを折るよりはるかに難しそう。

## 第3部第1回

あざらし

羽鳥 公士郎

はとり こうしろう

Hatori Koshiro

## 折り紙の哲学

本文ではあんなことをいっていますが、  
近頃は足が6本ある昆虫を創作しています。



第2部の終わりで、個々の作品について云々という話をしました。第1部の終わりでも同じようなことをいったと思います。二度あることは三度ある、とならないためにも、第3部では公約を実行しようと思います。

で、最初に取りあげるのは、笠原邦彦の作品です。まず、図をご覧ください。何にみえますか。あざらしにしかみえませんよね。そう、「あざらし」です。最初はあざらしにみえなかった人も、あざらしだと聞けばあざらしにみえるのではないのでしょうか。そして、いったんあざらしにみえたが最後、あざらし以外のものにはみえなくなります。前回紹介した象もそうですが、これこそ具象の局地。抽象こそ究極の具象なのですね。

さて、このことを「見立て」という観点から考えてみましょう。それも、作品を創作する立場ではなく、作品を眺める立場から考えてみます。

そんなものがあるかどうか知りませんが、「リアルなあざらし」という作品があったとします。専門家にみせたら「おお、これはバイカルアザラシだね」などといわれるかもしれません。そのような作品があざらしにしかみえないのはごく当たり前のことです。それは見立てるまでもなく、あざらしにみえてしまします。リアルな作品は、何かに見立てるということができないといってもよいでしょう。

それに対して、笠原の「あざらし」は、あざらしにしかみえないにもかかわらず、なぜあざらしにみえるの

か不思議です。なぜ不思議なのかといえば、この作品が作品として、実物のあざらしとは独立に存立しているからではないでしょうか。つまり、この作品はあざらしでなくてもよかったのに、あざらしにみえるから、不思議に思えるのです。もし地球上にあざらしなる生き物がいなかったとしても、この作品は存在するでしょう。もちろん、その場合は、あざらしではない、別なものに見立てられるでしょう。

折り紙を觀賞するとき、「折り」を見ると同時に、「紙」も見ることになります。内山光弘は「折り数が増えることによって、せつかくの美しい紙がどんどん死蔵されてしまう」といったそうですが、このことは、特に

複雑な作品の場合、省みられない傾向があります。確かに、紙をざっくりとみせるということはとても勇気のいることです。ですが、よけいな折りをそぎ落として、紙に語

らせることによって、折り紙作品が彫刻作品に比すべき存在感をもつことができるのです。

そういう意味でいえば、この作品も「絶対折り紙」としての要素をもっているといえます。私の考えでは、名作はすべからず絶対折り紙でなければなりません。「リアルなあざらし」が、実物のあざらしと似ているということだけでしか評価できないとし

たら、いいかえれば、「折り」は評価できるが「紙」は評価できないとしたら、すぐれた折り紙作品であるとはいえません。

「絶対折り紙」・「標題折り紙」という概念は、論理学でいう内包的性格をもっていると考えられます。折り紙作品を、この作品は絶対折り紙、この作品は標題折り紙、というように、二つの集合に分けることはできません。ある一つの作品が、見方によって、絶対折り紙になったり、標題折り紙になったりします。

さて、この作品は標題折り紙としての要素ももっていて、その点で、前回までお話ししたジャクソンの一線折りとは異なっています。最後に、このことについて考えてみましょう。ジャクソンの一線折りは、何かに見立てられているわけではないのに、名作たり得ます。それは、「紙」そのものが、美しかったり、優しかったり、官能的だったりするからです。この場合、「紙」と「かたち」が直結しています。

では、「あざらし」はどうでしょうか。「あざらし」を、あざらしとしてみずに、「そのようなかたちをした紙」としてみたとすれば、正直に言って、たいしておもしろいかたちではないと思います。もしもこの作品が何にも見立てられなかったとしたら、あるいは見立てがうまくいかなかったとしたら、この作品は決して名作にはならなかったでしょう。

ここに見立てのおもしろさがあります。それ自体はなんということもないものが、何かに見立てられたとたん、様相が一変するのです。今まではただの紙にすぎなかったものが、生命を得て躍動しはじめます。この歓びこそ、スーパーコンプレックスでは味わえない、「初級」作品の醍醐味です。

笠原邦彦  
「あざらし」



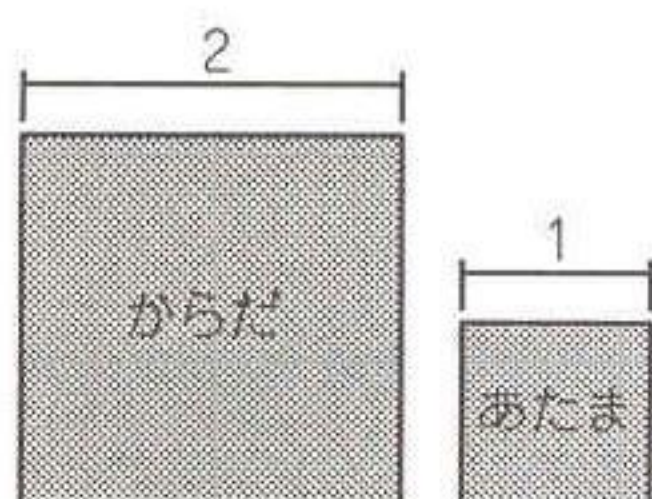
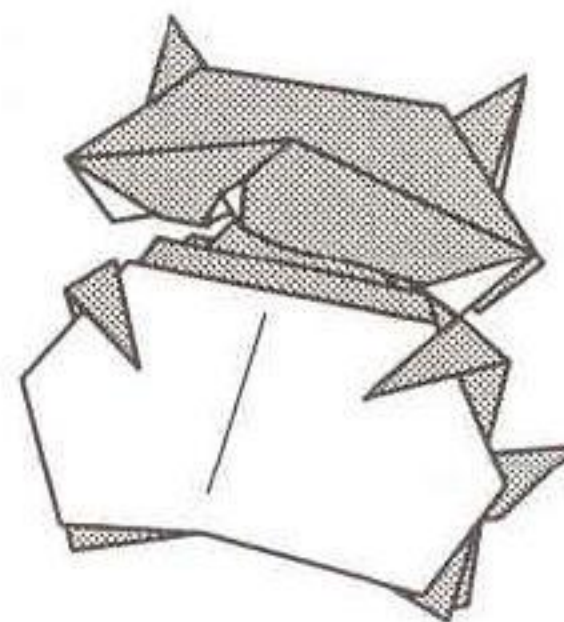
笠原邦彦著  
ジョイ・オブ・オリガミ  
双樹舎刊

1998 年 4 月例会講習作品

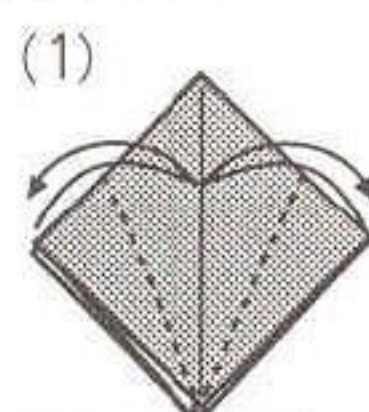
# たぬき TANUKI

木村良寿  
Yoshihisa Kimura

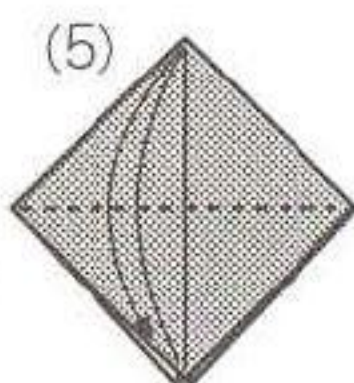
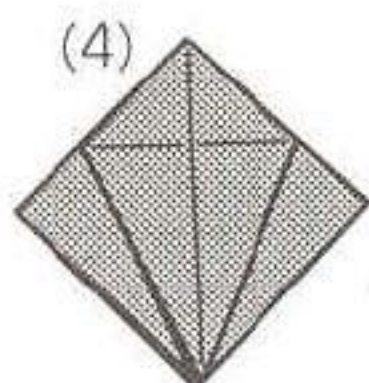
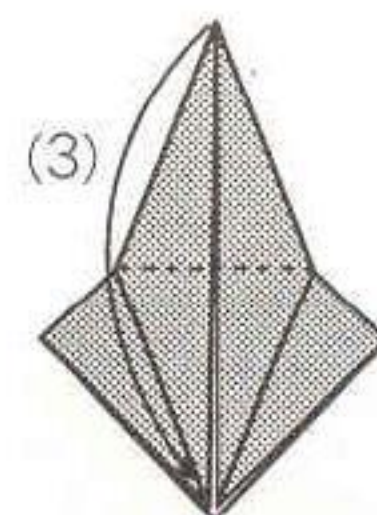
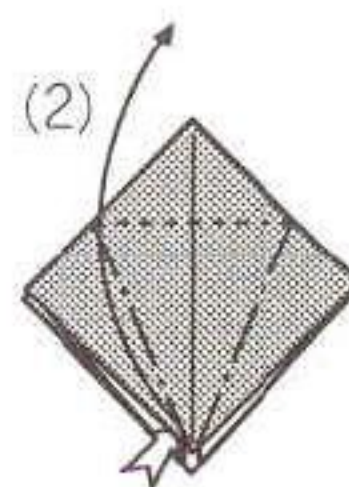
日本折紙教会の「おりがみ」80 年 11 月号 (62 号) にて  
発表された作品ですが、すでに品切れですので掲載しました。



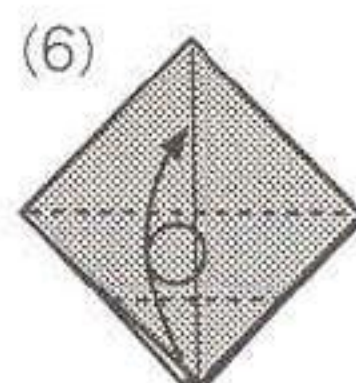
からだ



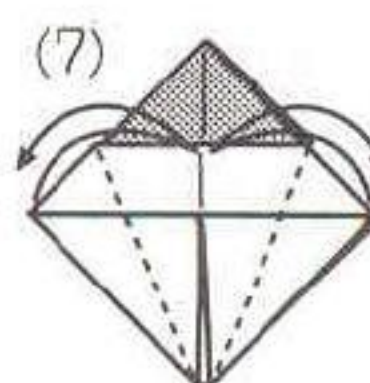
正方基本形から



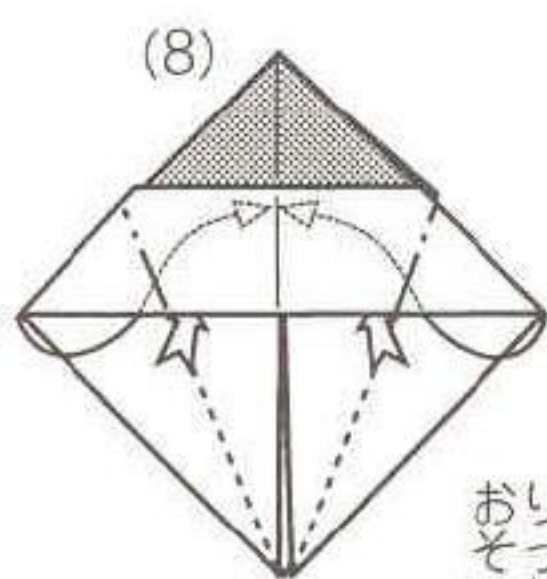
おりすじをつける



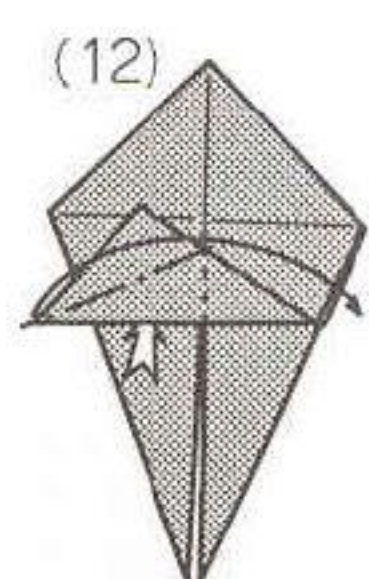
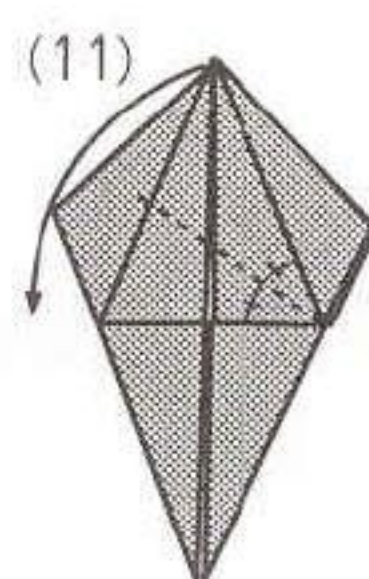
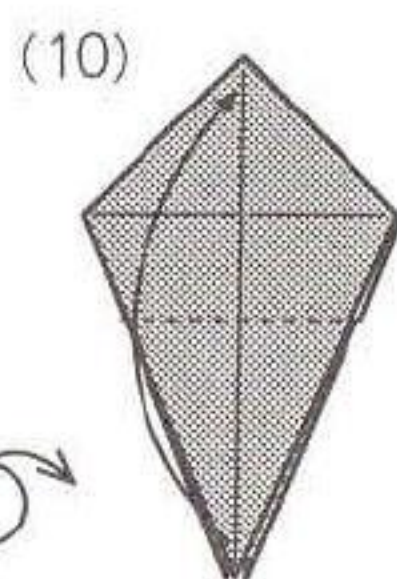
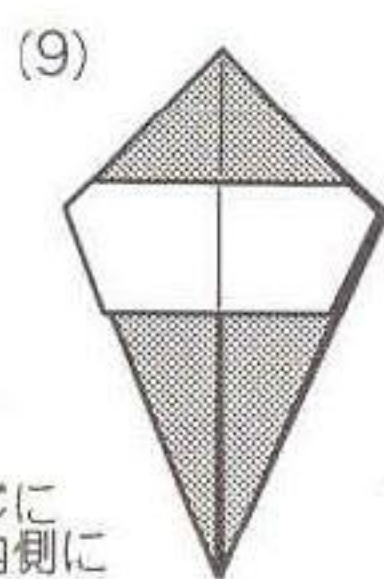
まくようにおる



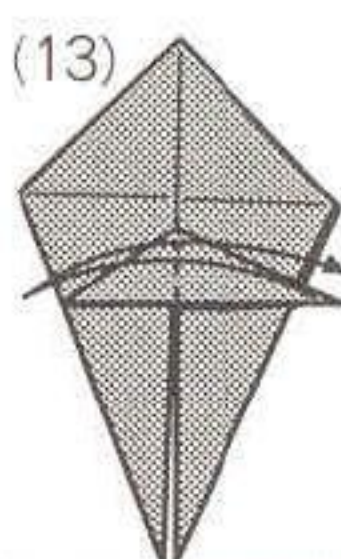
おりすじをつける



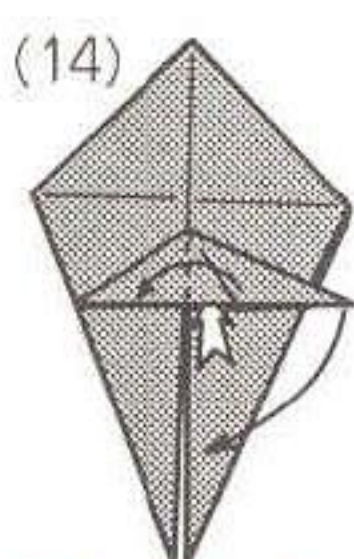
おりすじに  
そって内側に  
入れる



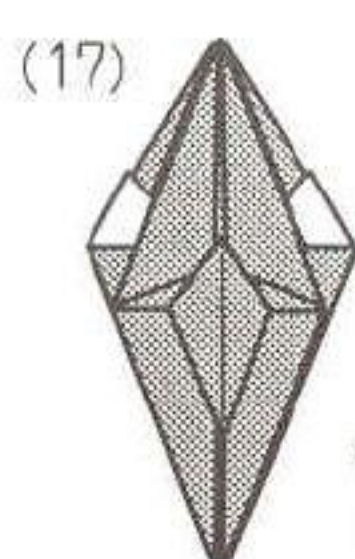
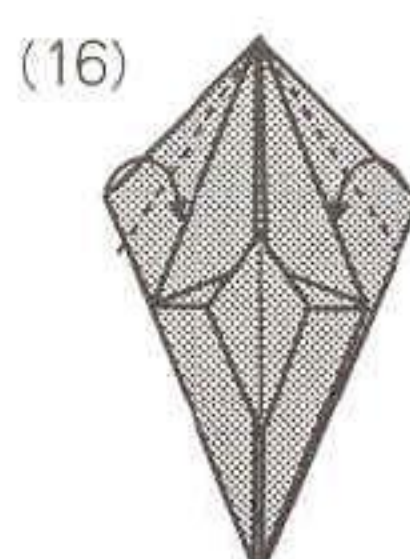
ひらいてつぶす

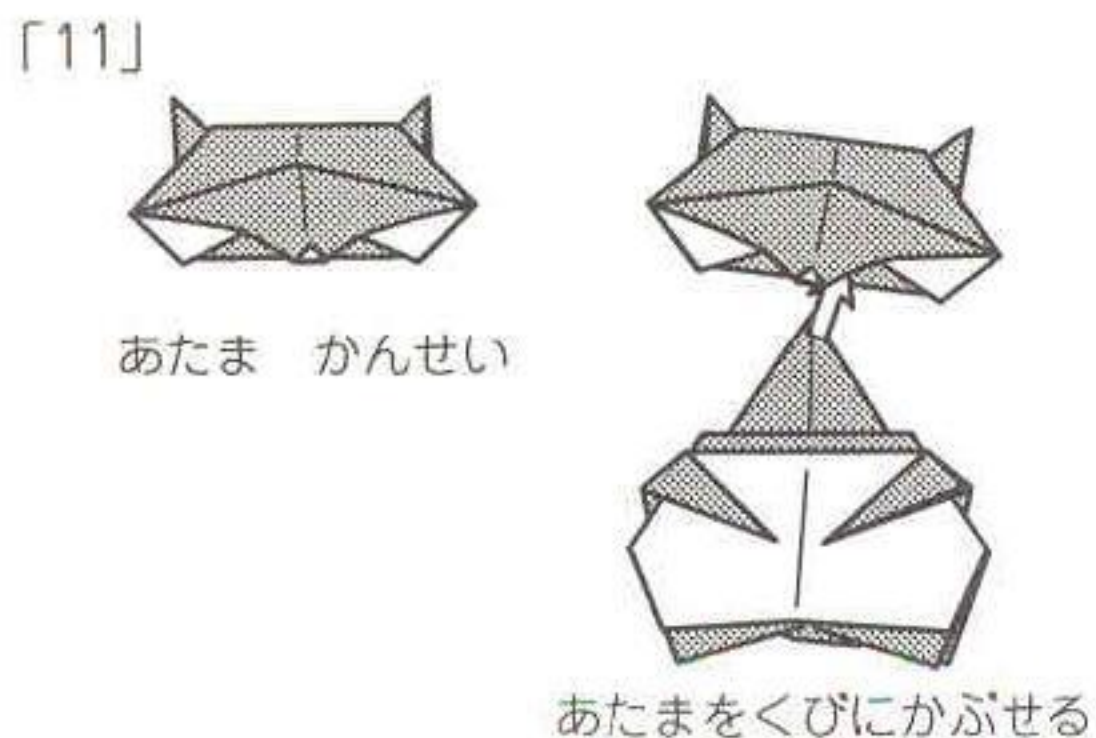
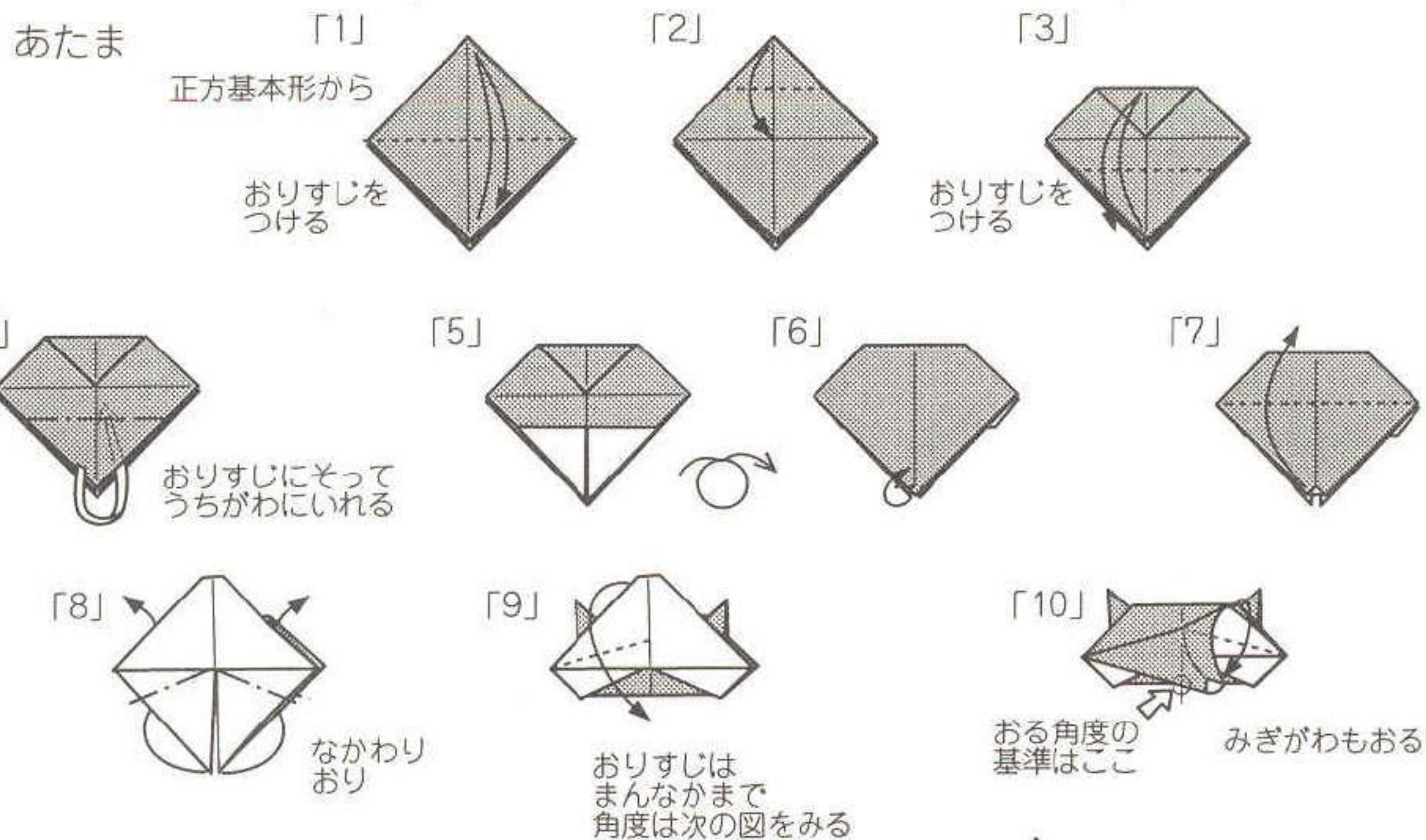
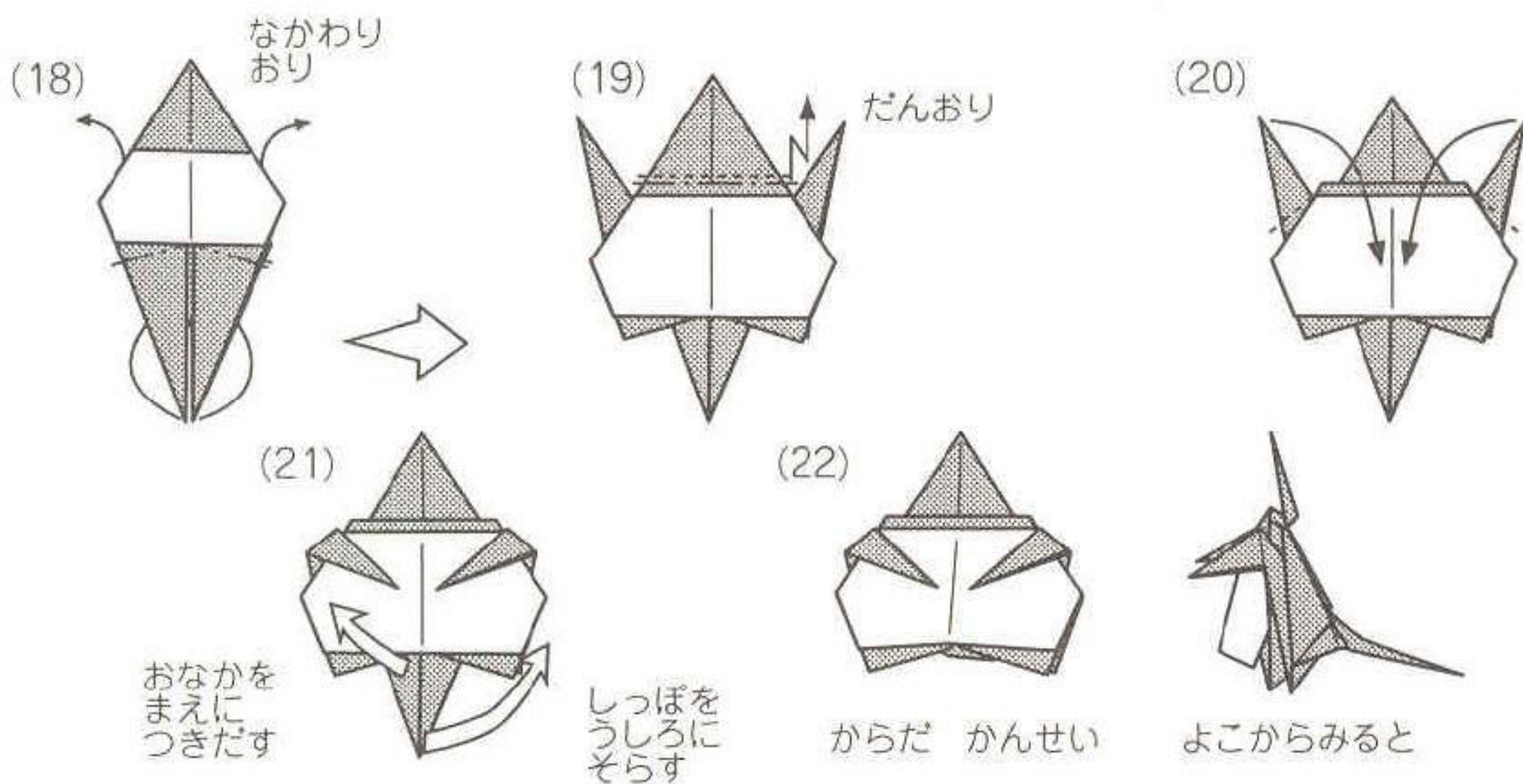


おりすじをつける



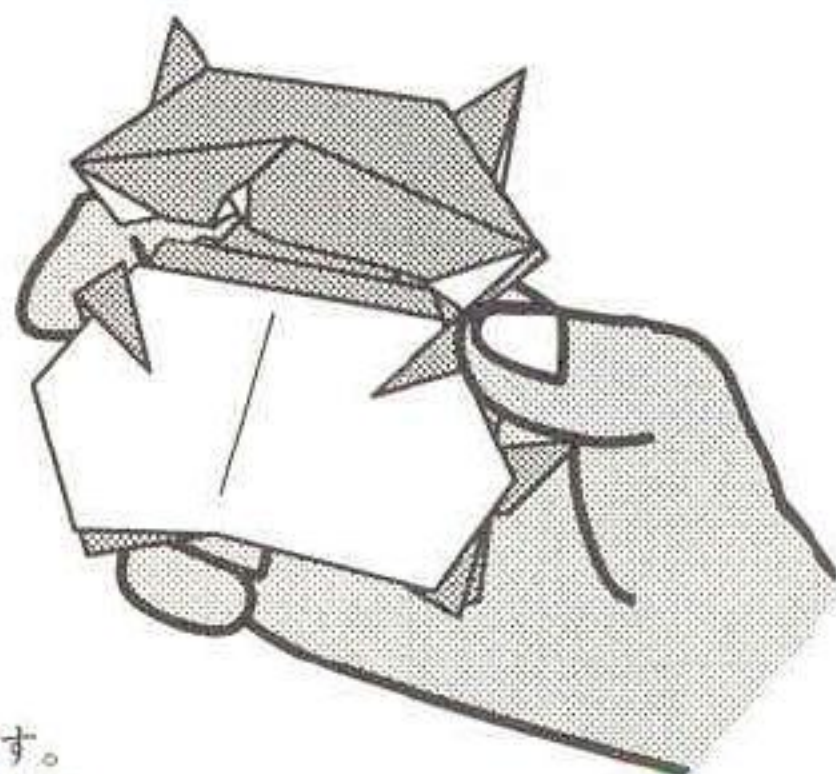
ひらいてつぶす





ひじをゆびでおさえおしたりゆるめたりするとおなかをたたきます

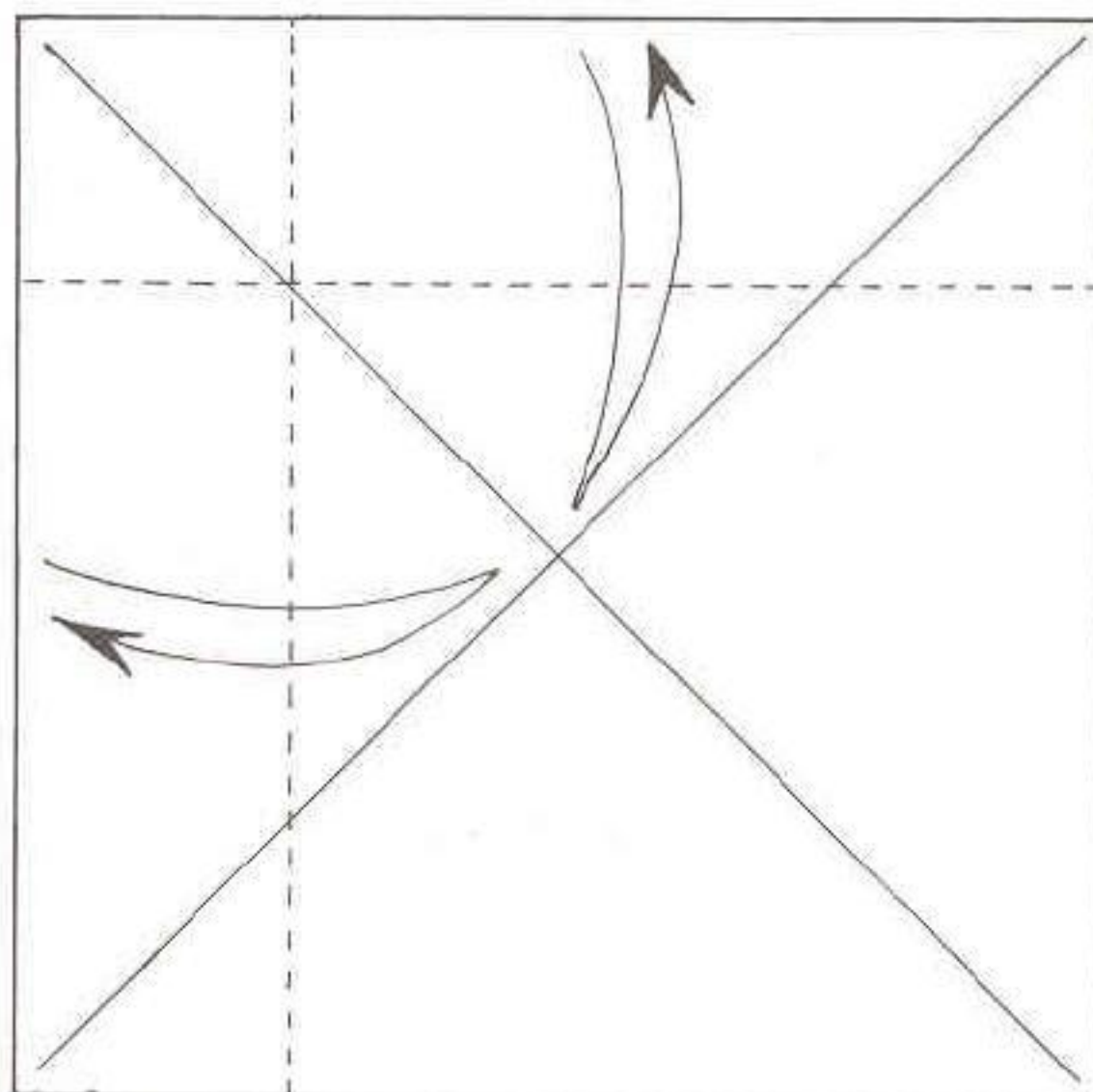
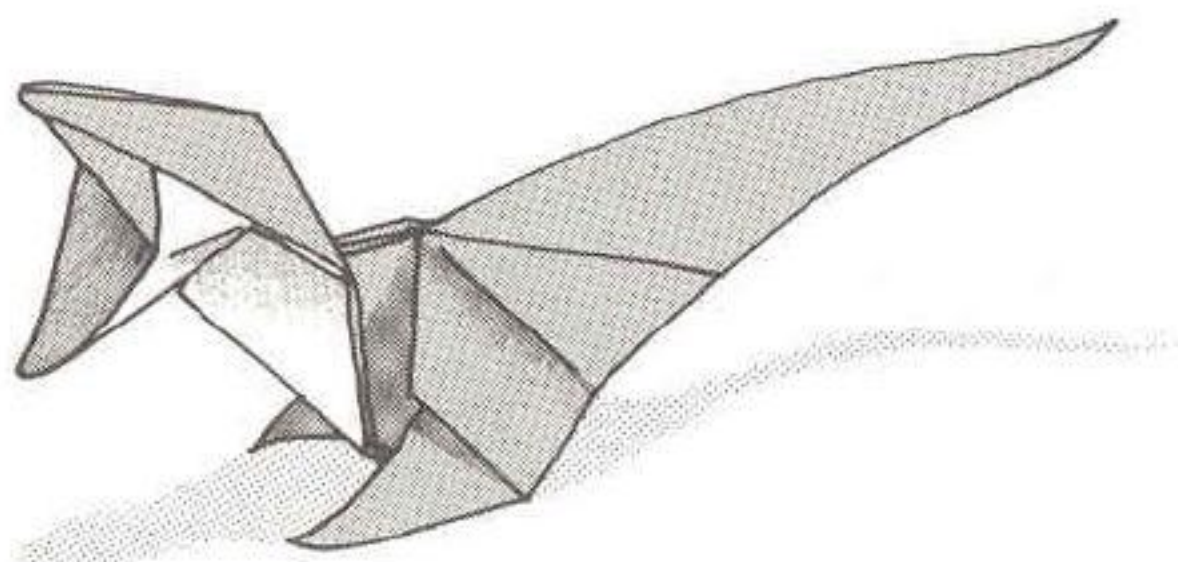
これは狙っていたわけではなくて偶然見つけた動きです。あまり期待しないように。



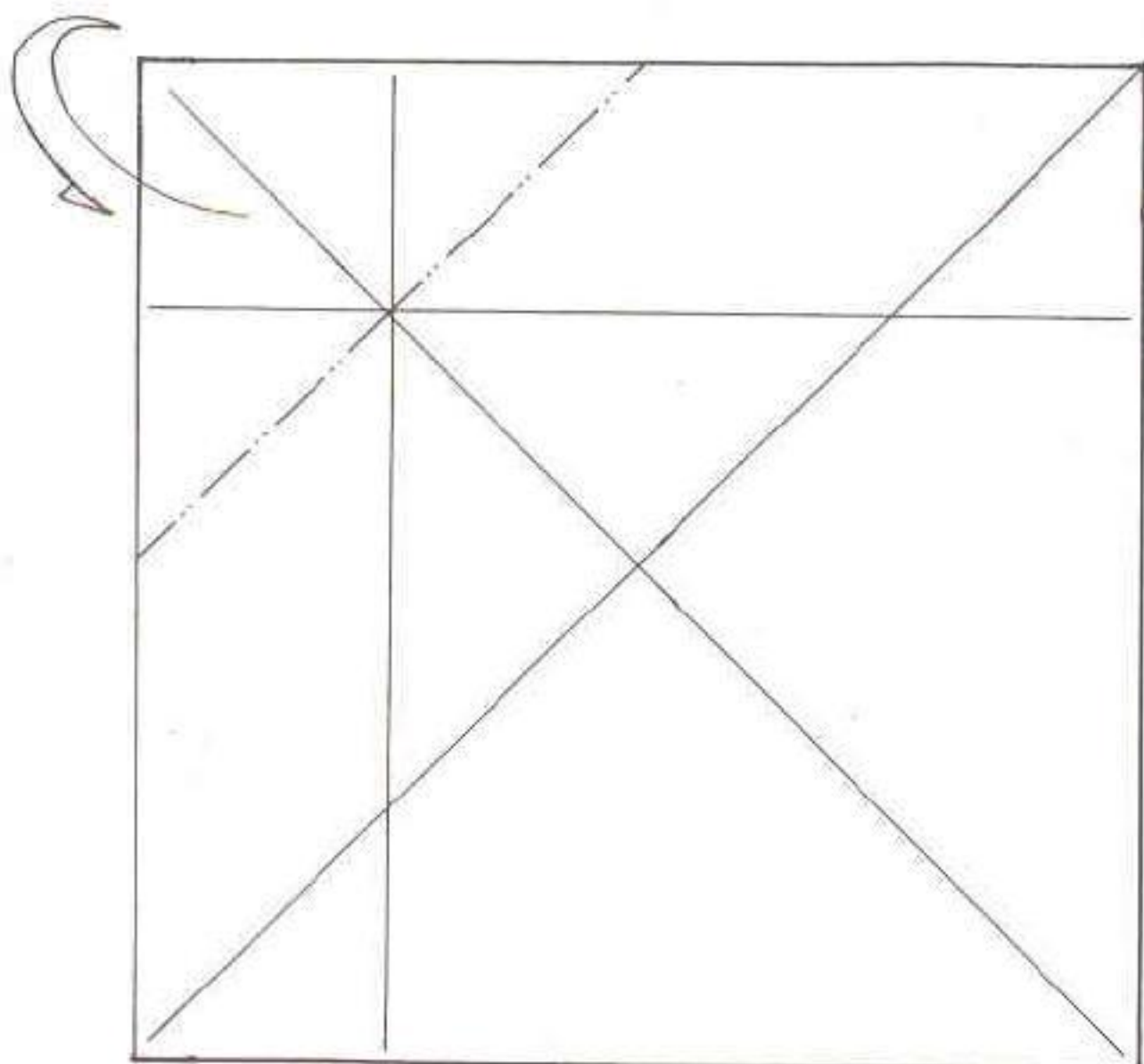
# ちび"REX" CHIBI-REX

19980425・創  
19980525・図

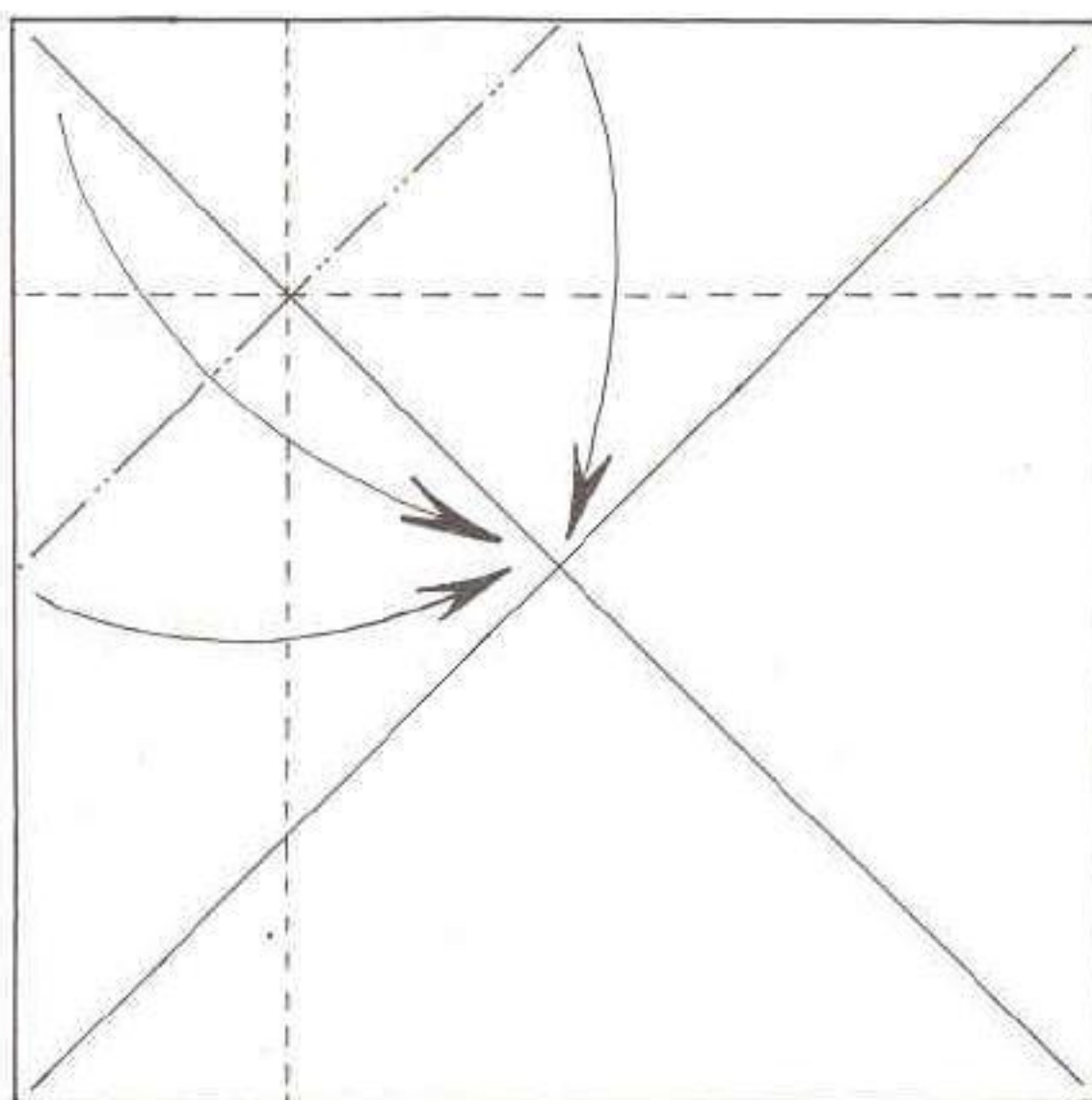
川村みゆき<sup>®</sup>



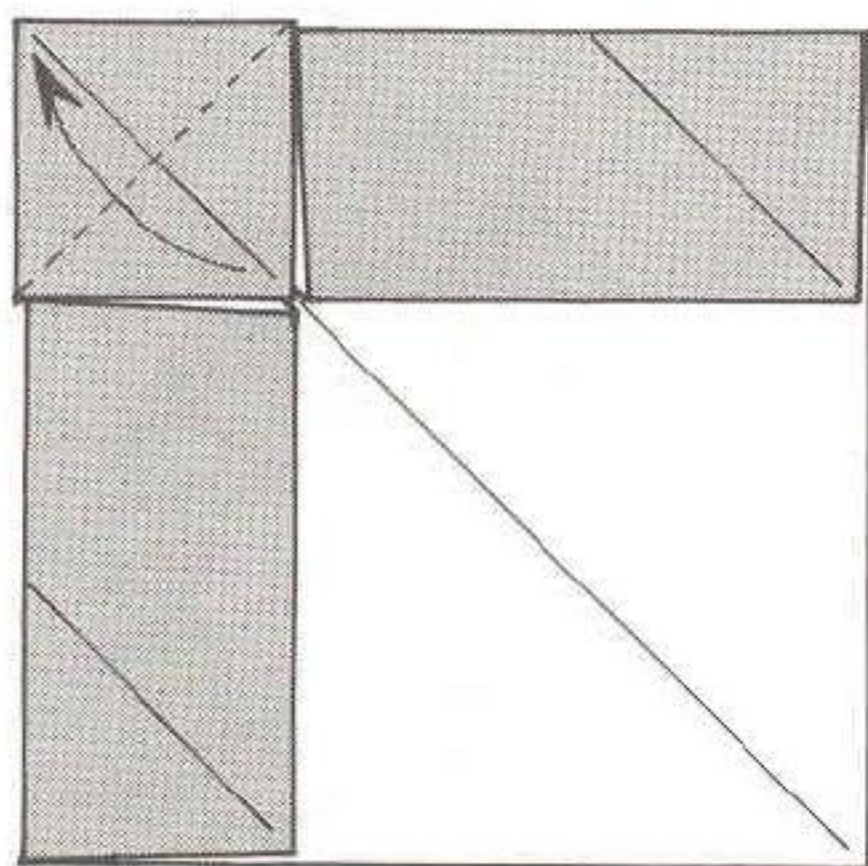
①



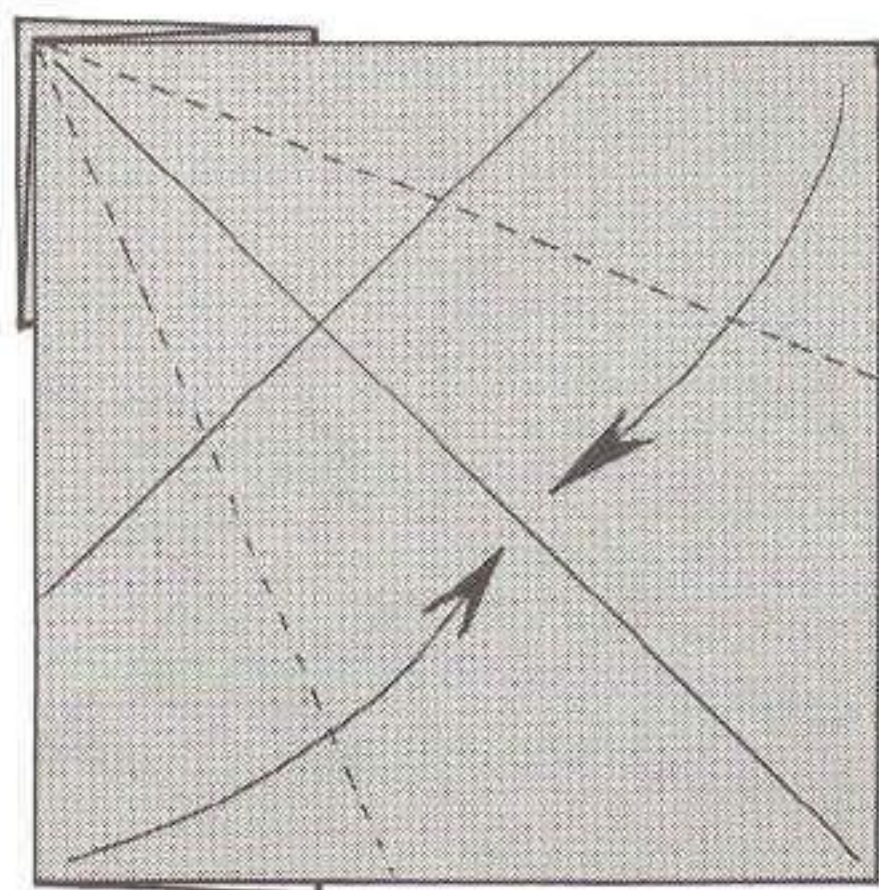
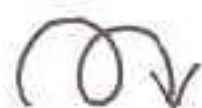
②



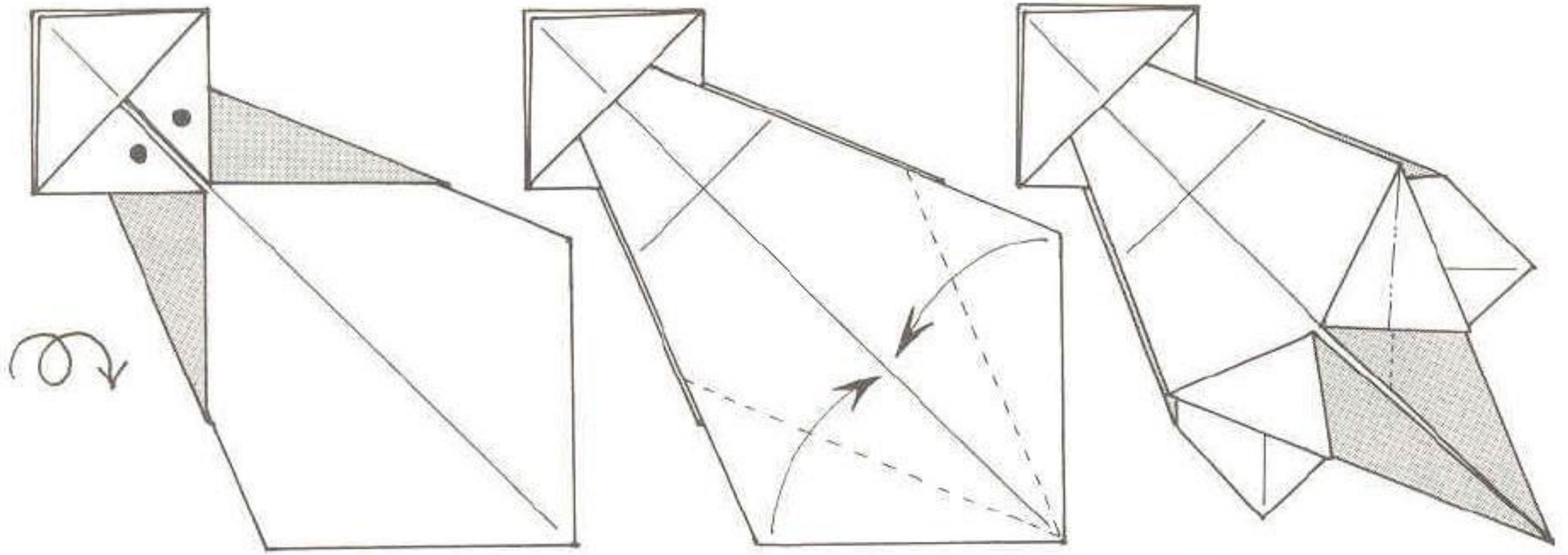
③ 図のとおりにたたむ



④ 一枚だけ折り上げる



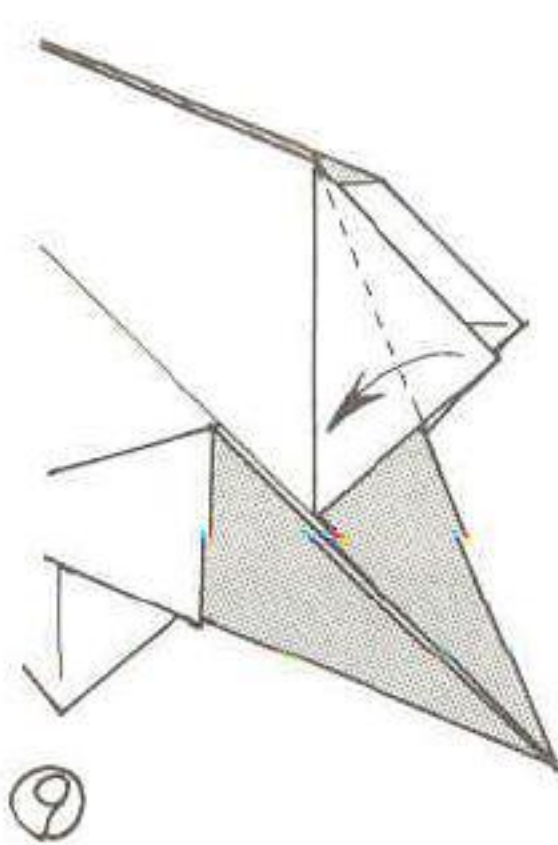
⑤



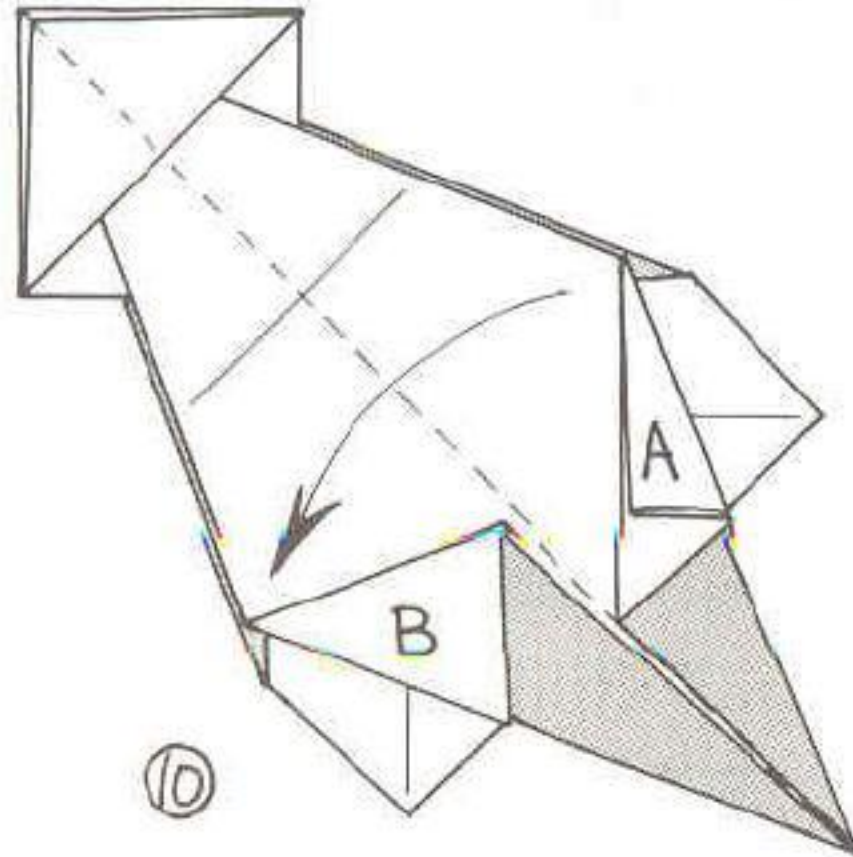
⑥ 図の●印の部分を上、下に入れかえる

⑦

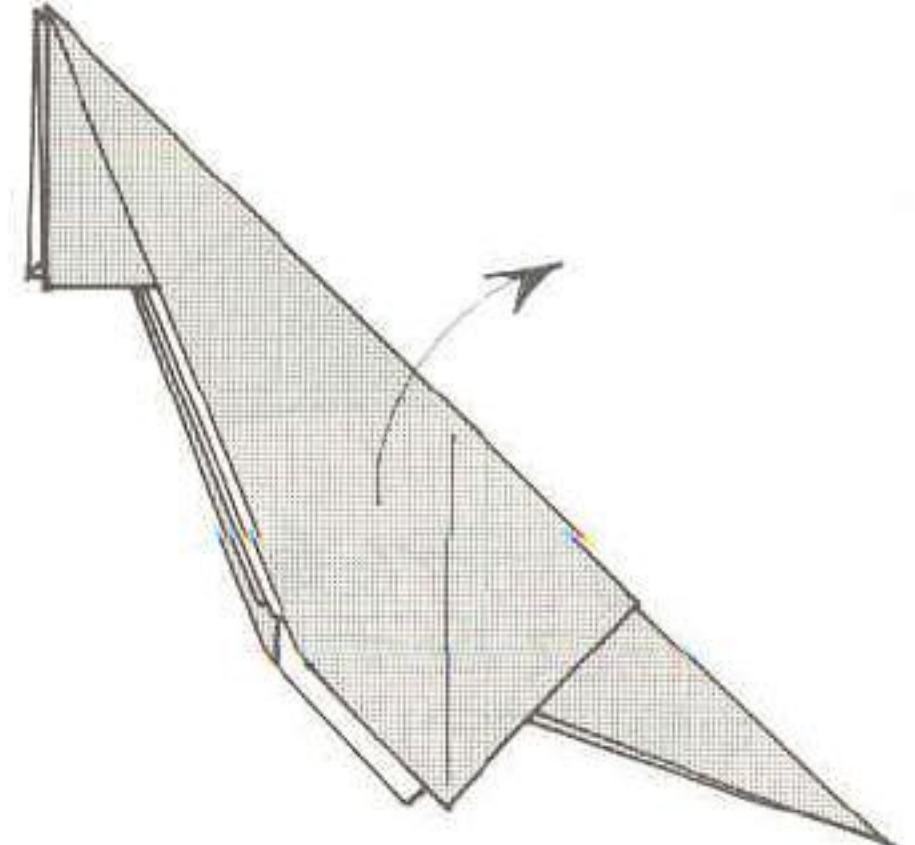
⑧ 広げてつづす (右側のみ)



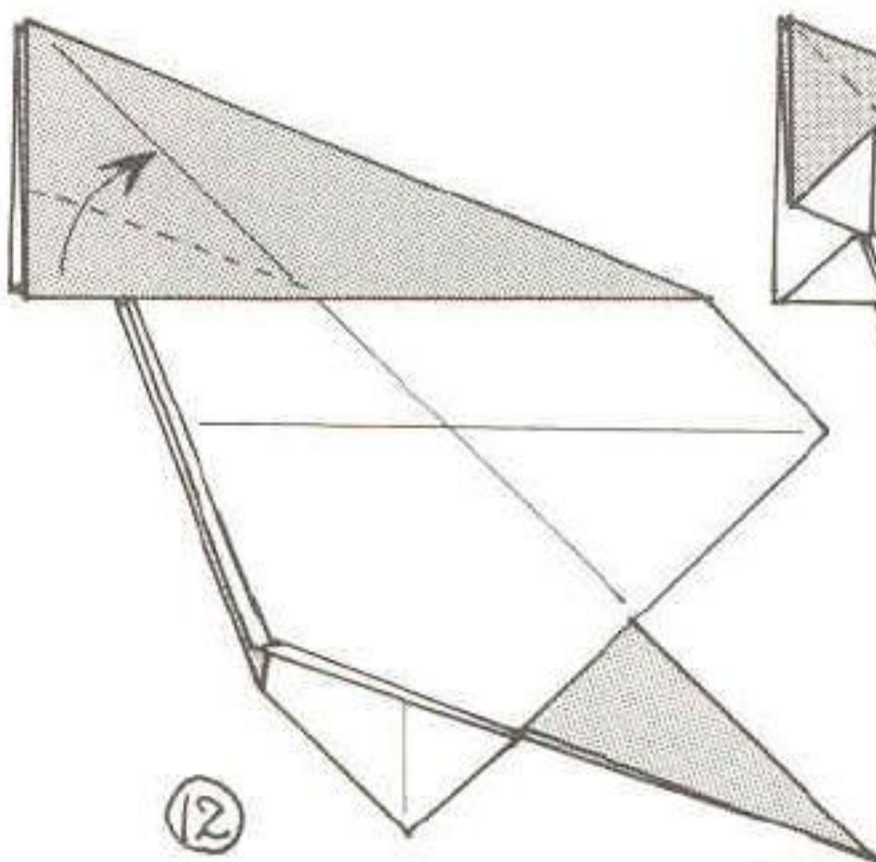
⑨



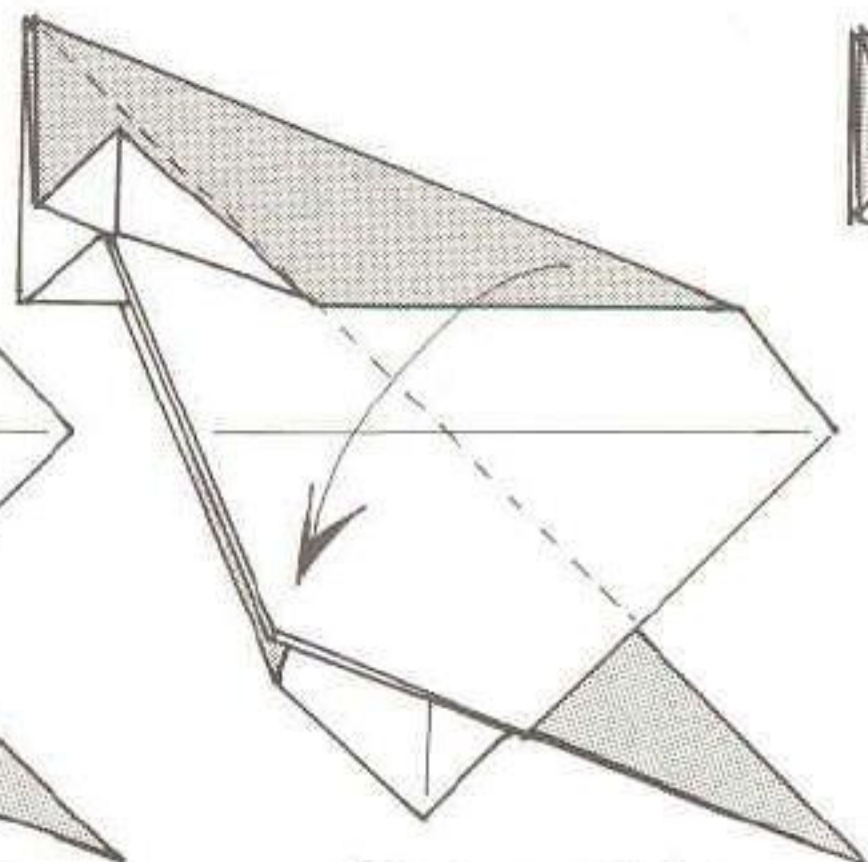
⑩



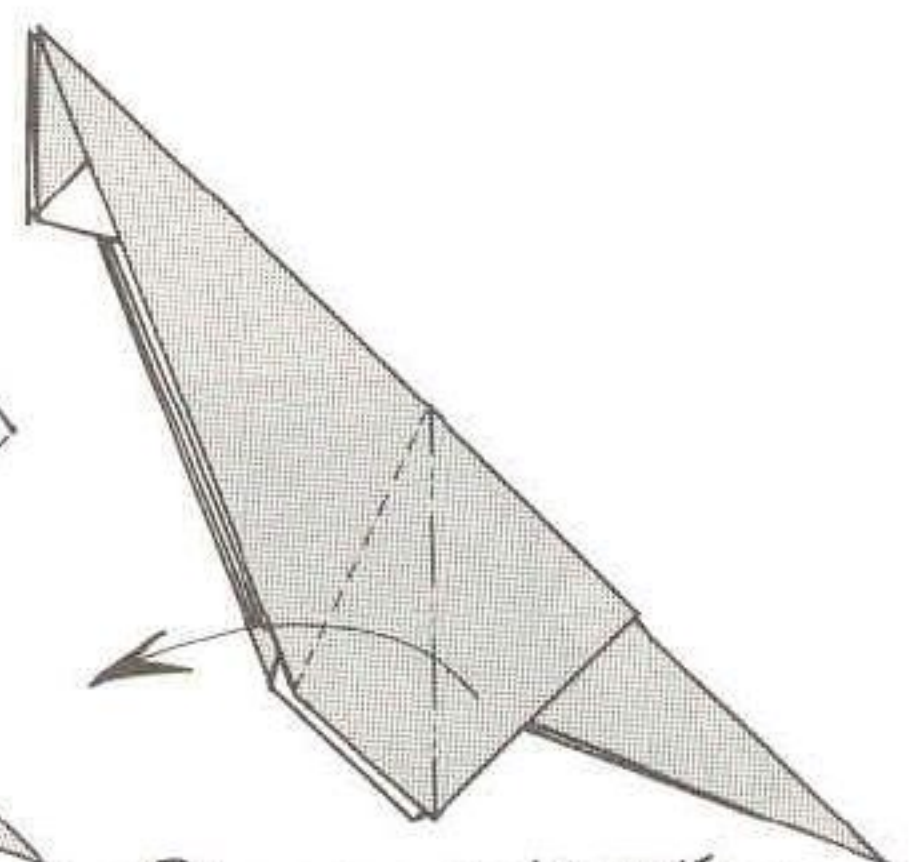
⑪ 一枚だけでもとす



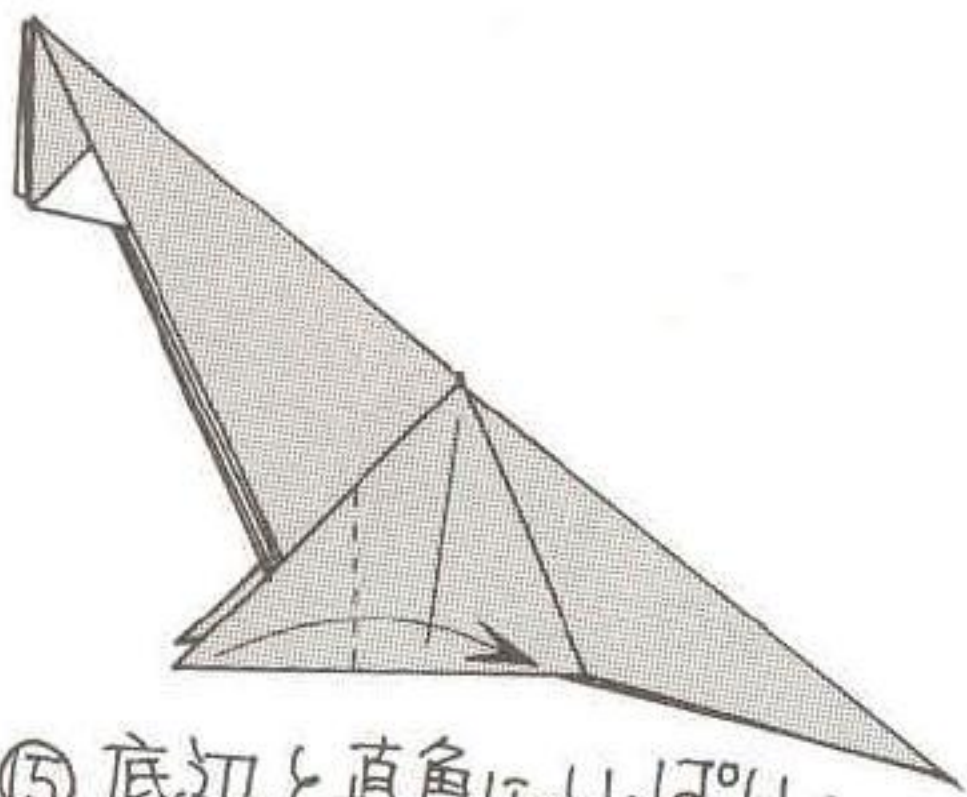
⑫



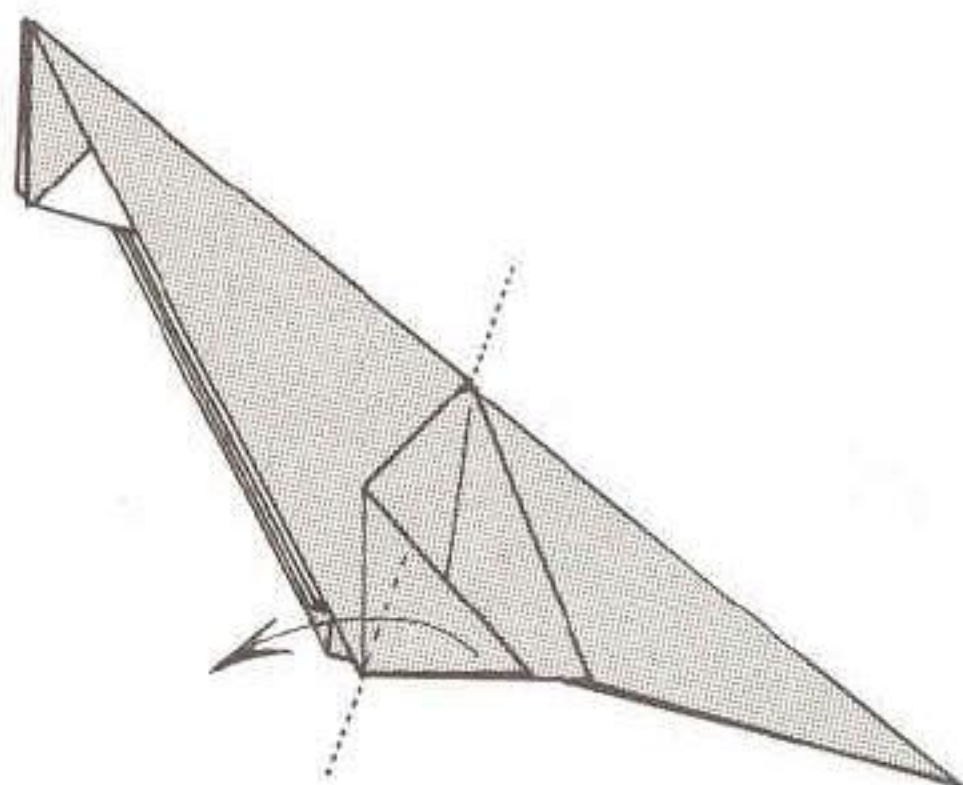
⑬ 向こう側も  
⑪～⑬と同じ



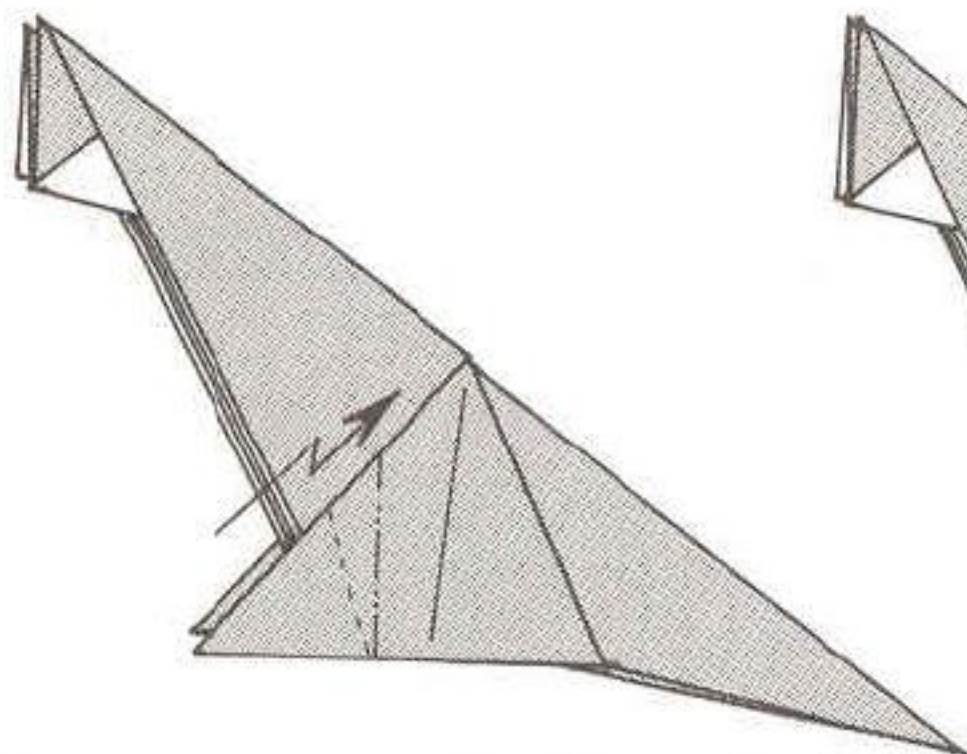
⑭ ついてる折り線で、  
いっぱいまで引きよせる。  
向こう側も同じ。



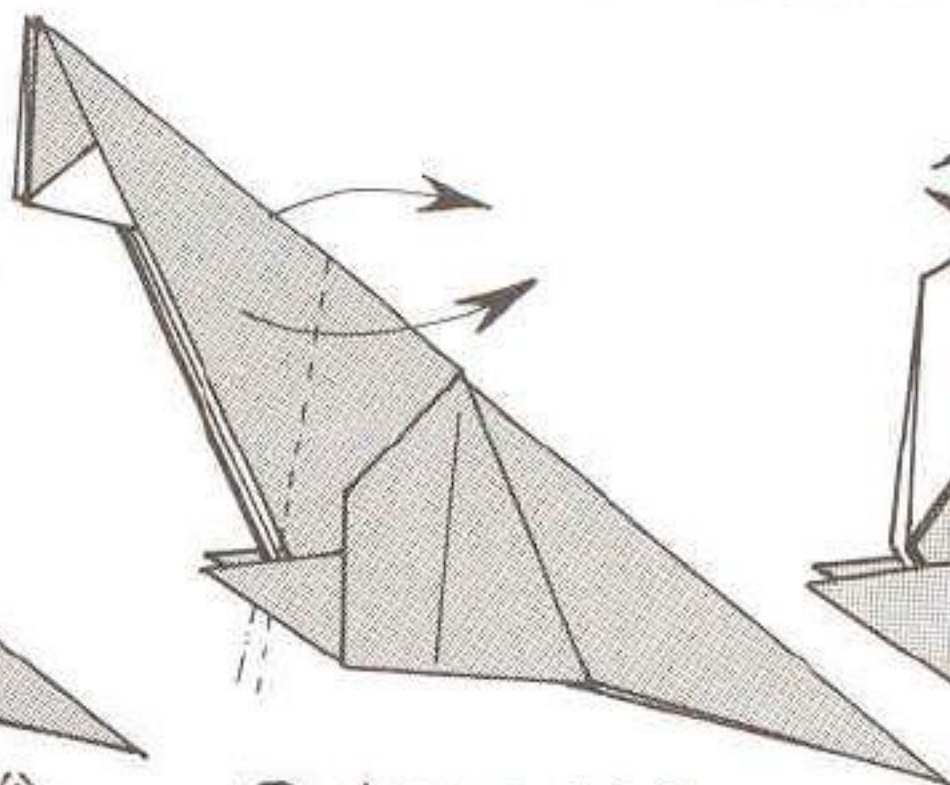
⑮ 底辺と直角に、いっぱいまで折る。向こう側も同じ



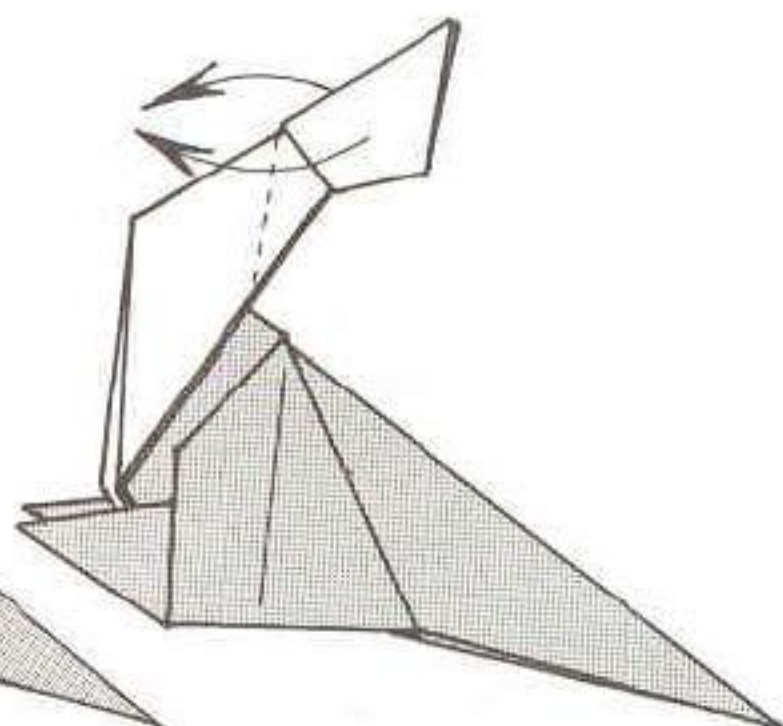
⑯ 図の仮想線をもって折る。向こう側も同じ



⑰ ⑮、⑯でつけた線で、山谷逆にして段折り。。。中割り折りではない。向こう側も同じ

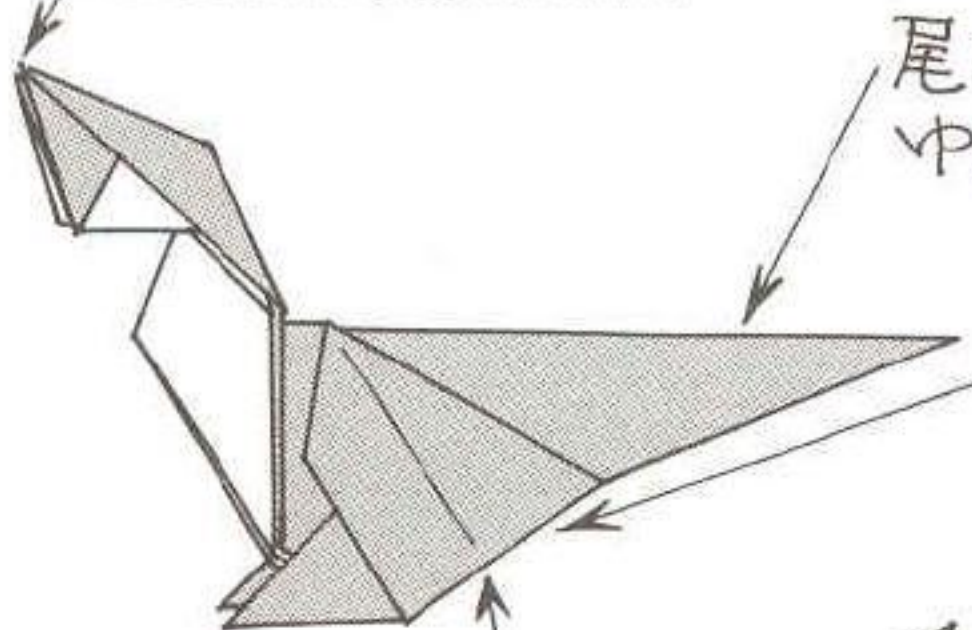


⑱ かぶせ折り



㉑ かぶせ折り

口をめい、いっぱい開く



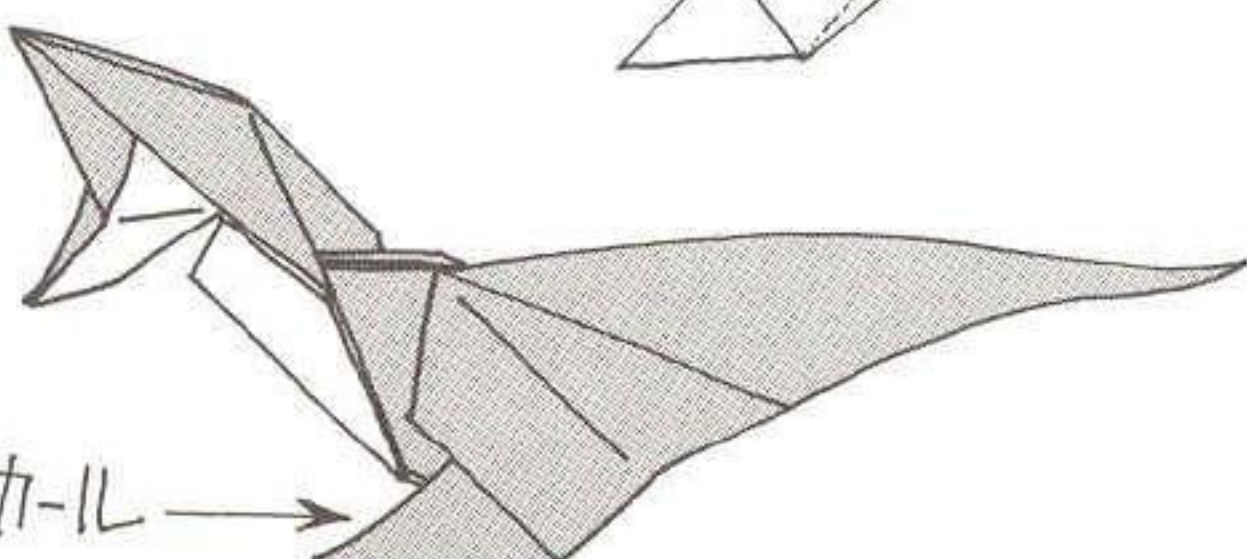
⑳ 図のAの部分をもBの向こう側にかませて下腹が開かないようにする。

仕上げ例

尾はツメなどでしごいてゆるくカーブをつける

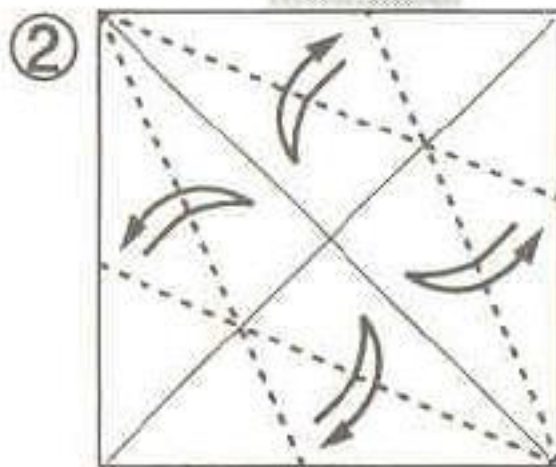
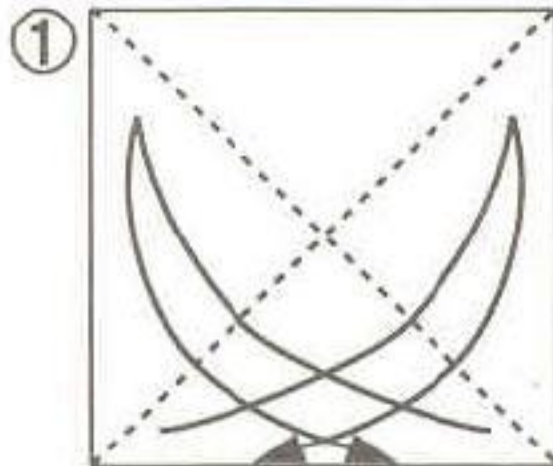
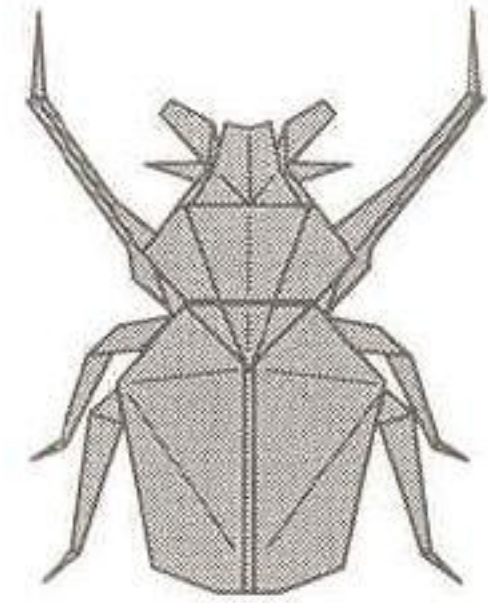
図のように折って、太ももをふくらませる

足を少し内巻きにカール

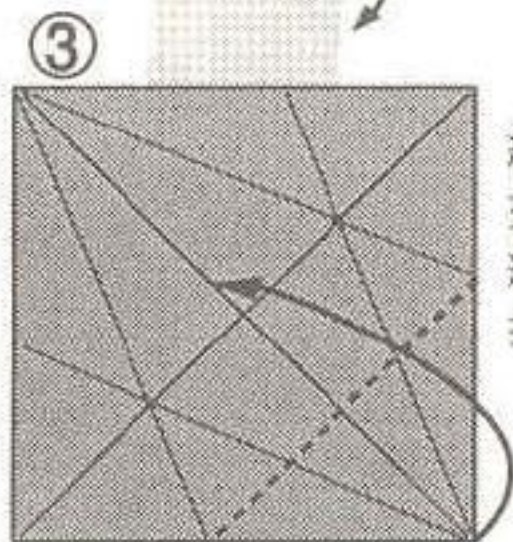


# ゴライアス オオツノハナムグリ

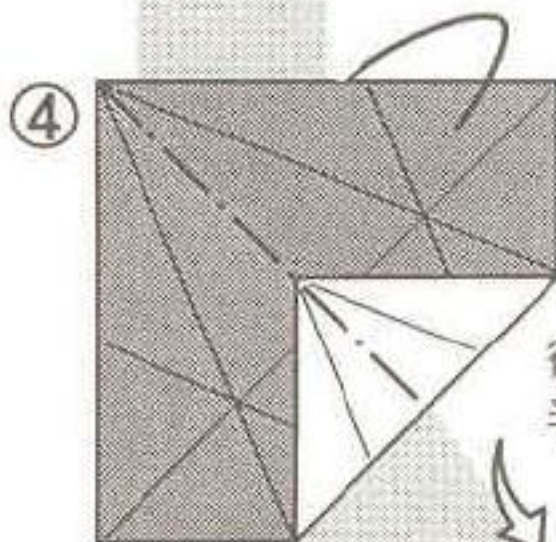
作・図 西川誠司  
seiji nishikawa



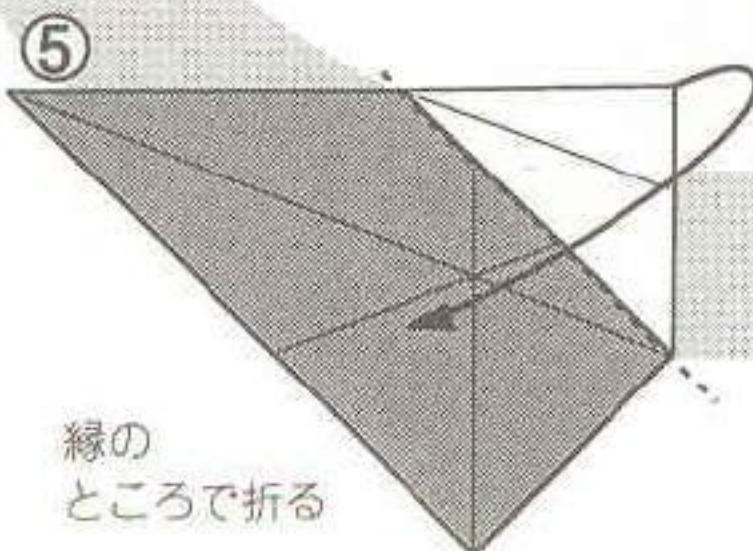
縁を  
折り筋に  
合わせて  
折る



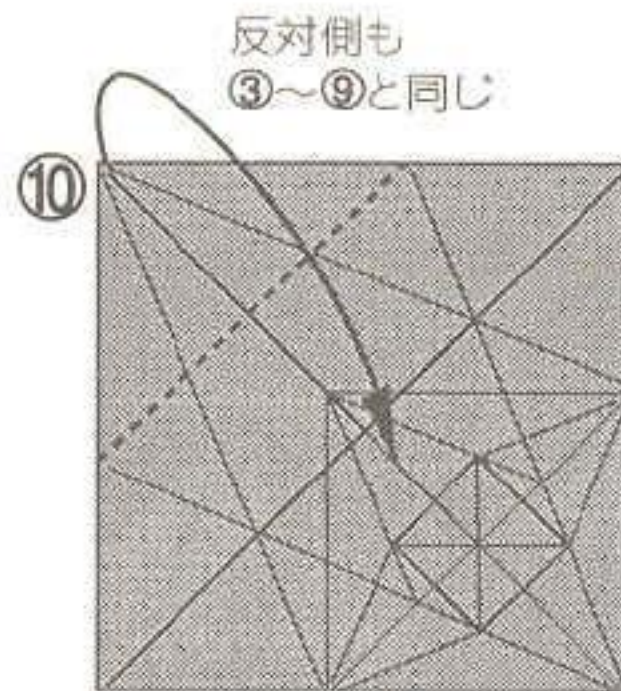
縁と折り筋の  
交点を  
結ぶ線で  
折る



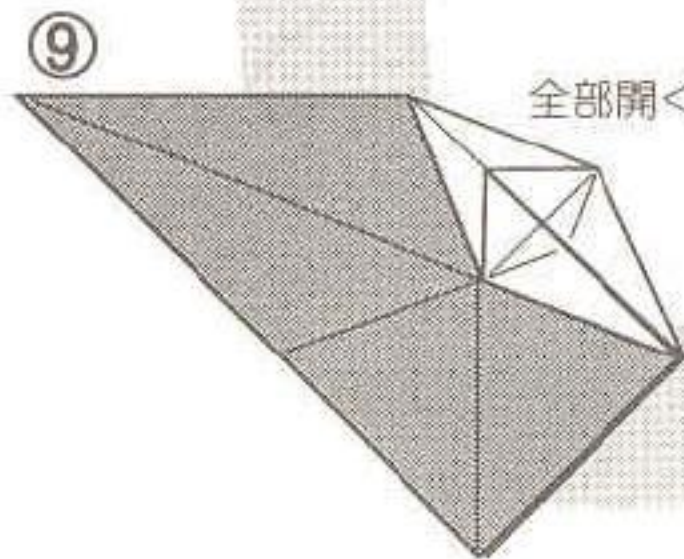
後ろへ  
半分に折る



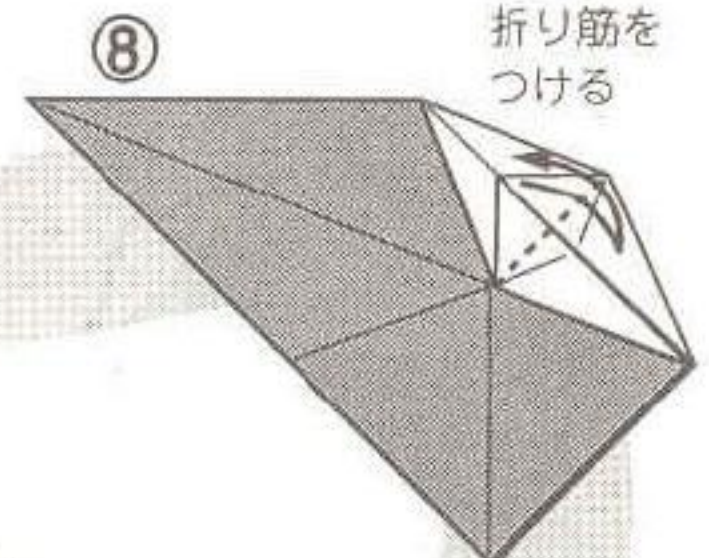
縁の  
ところで折る



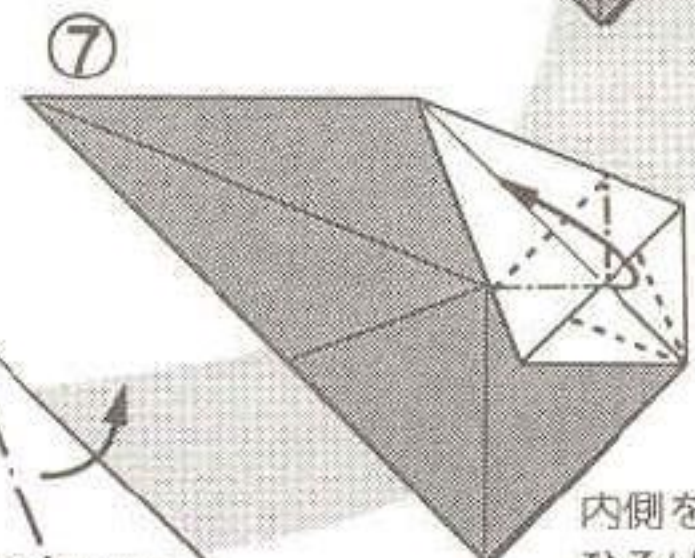
反対側も  
③～⑤と同じ



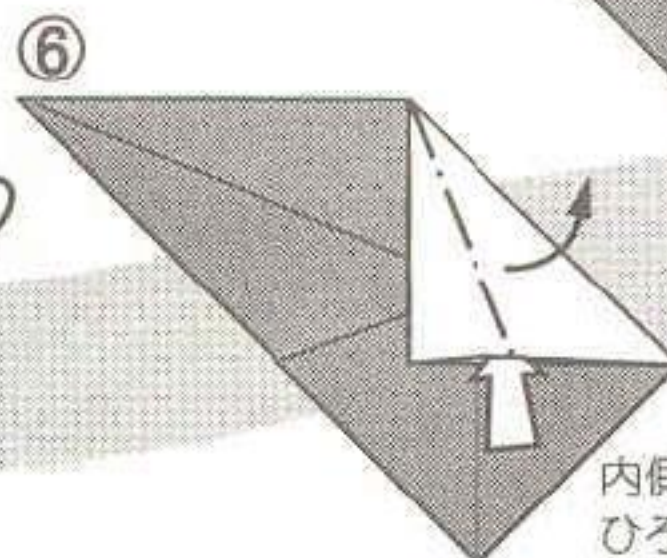
全部開く



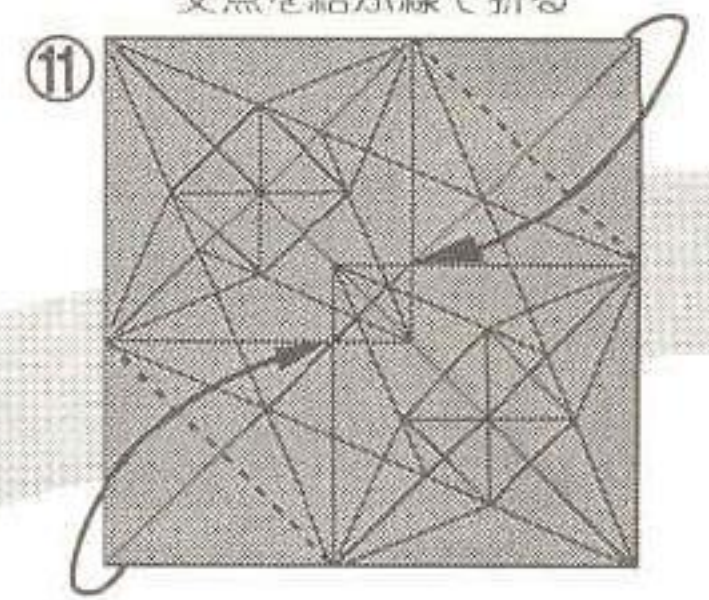
折り筋を  
つける



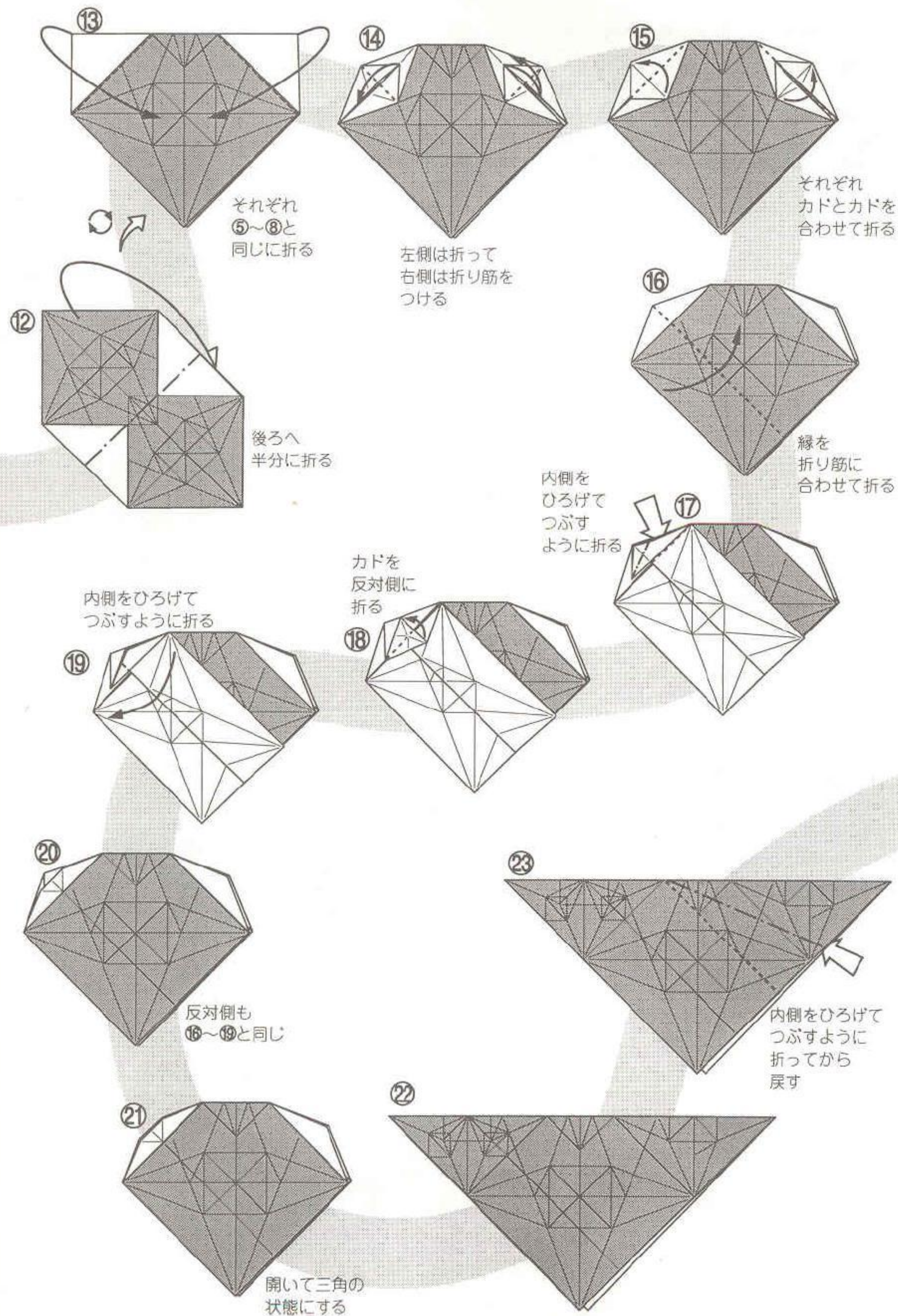
内側を  
ひろげて  
つぶす  
ように折る

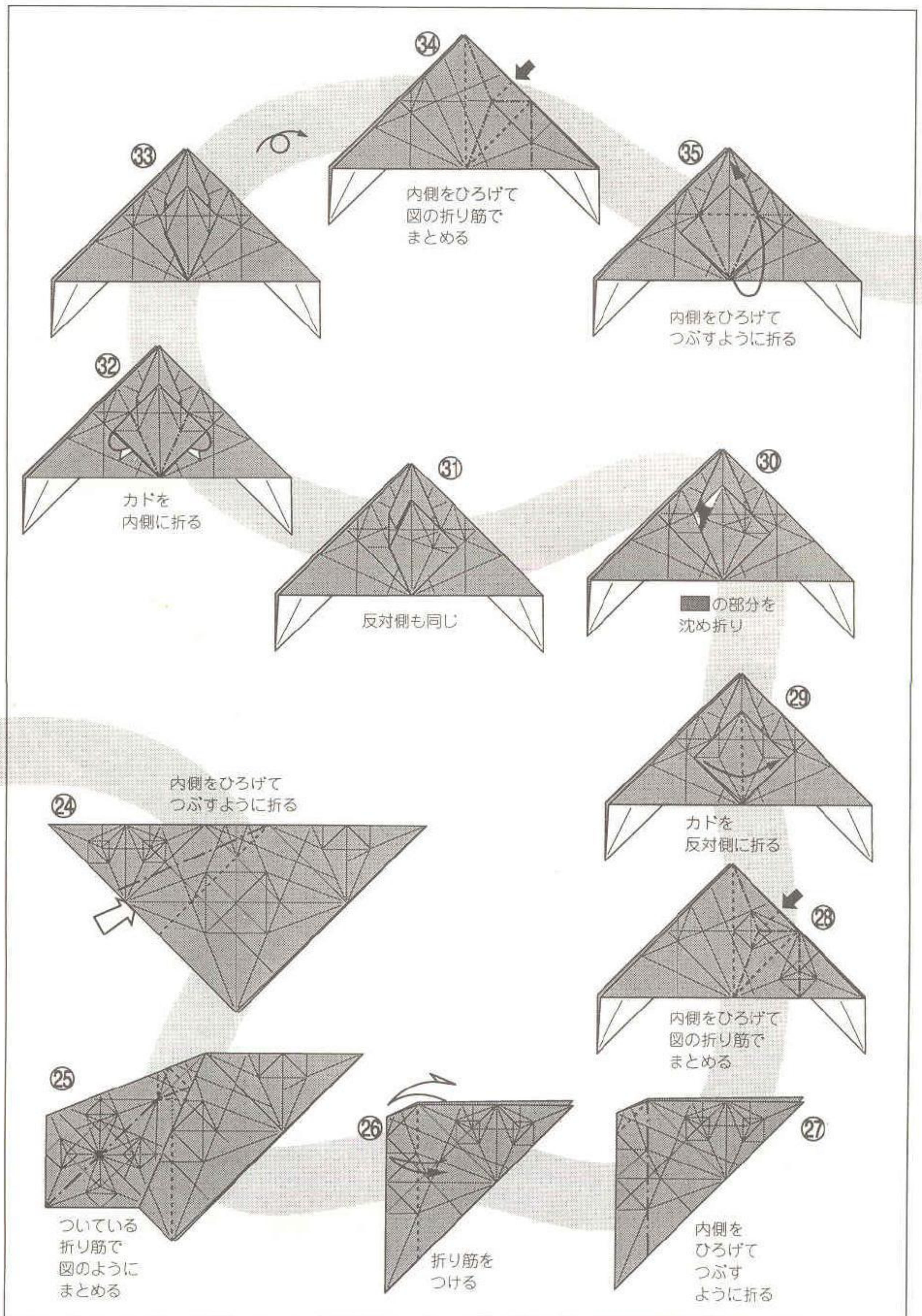


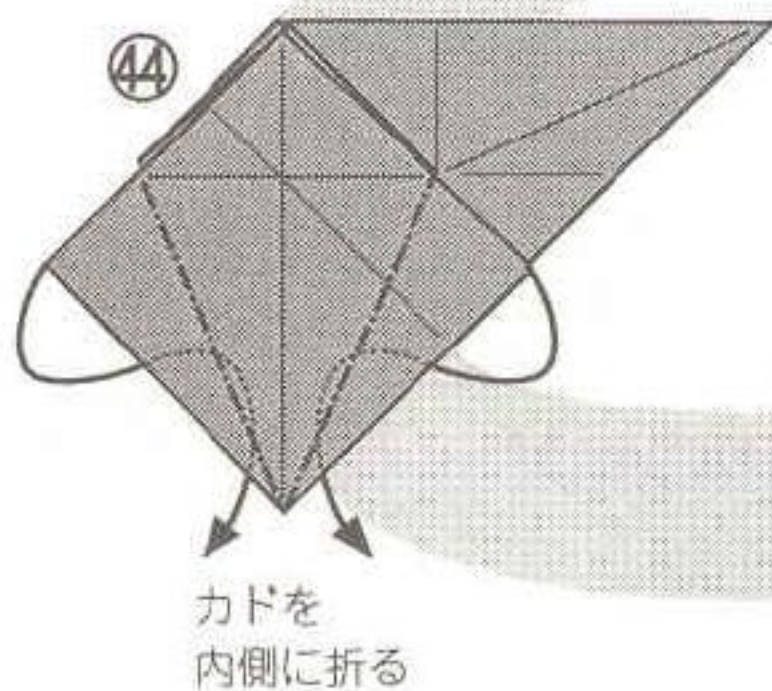
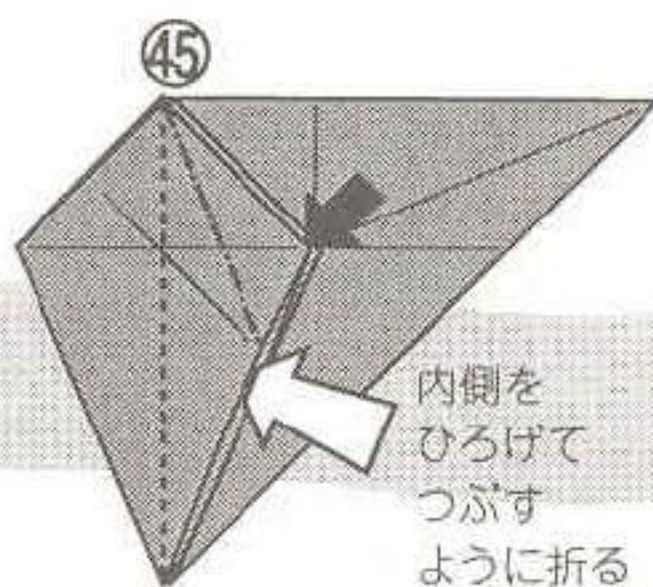
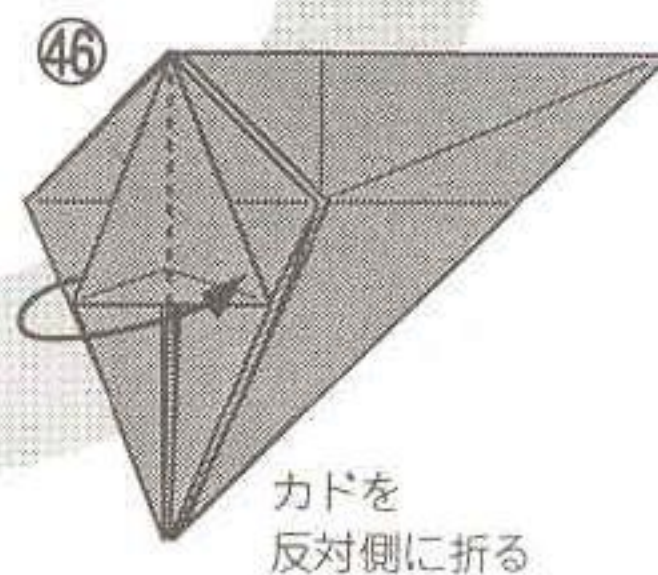
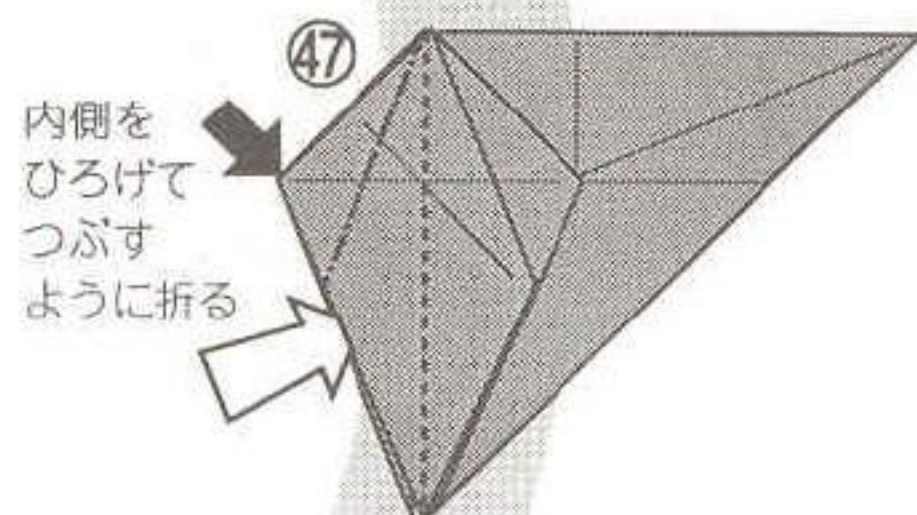
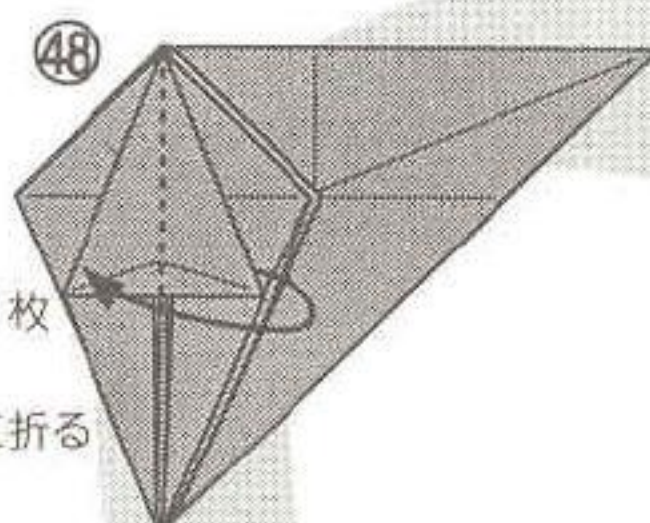
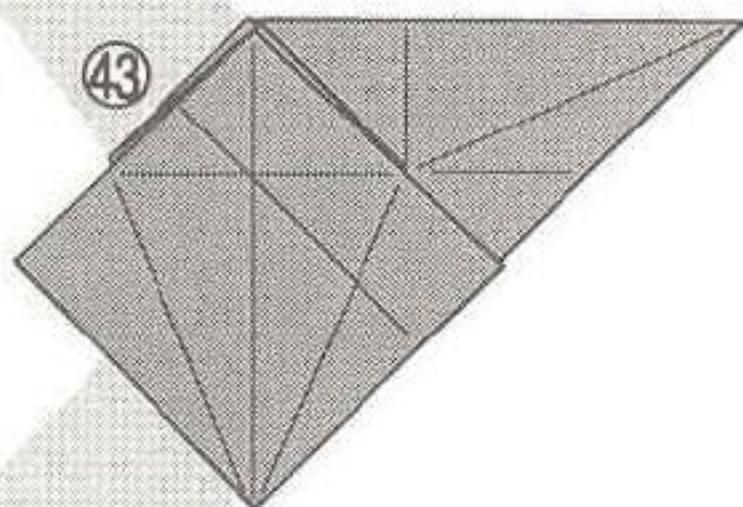
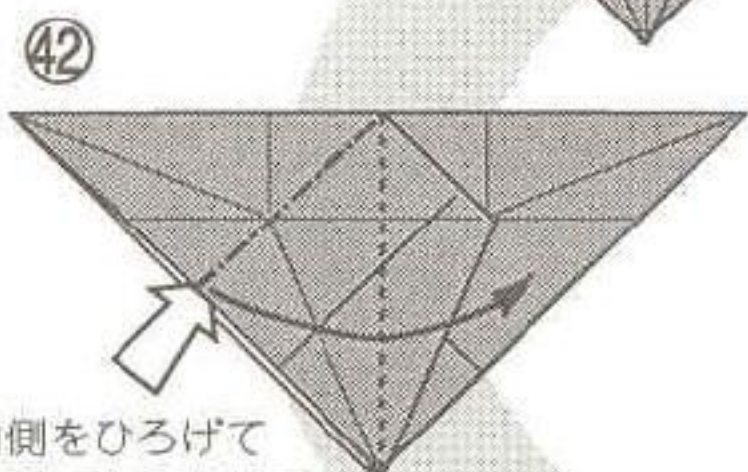
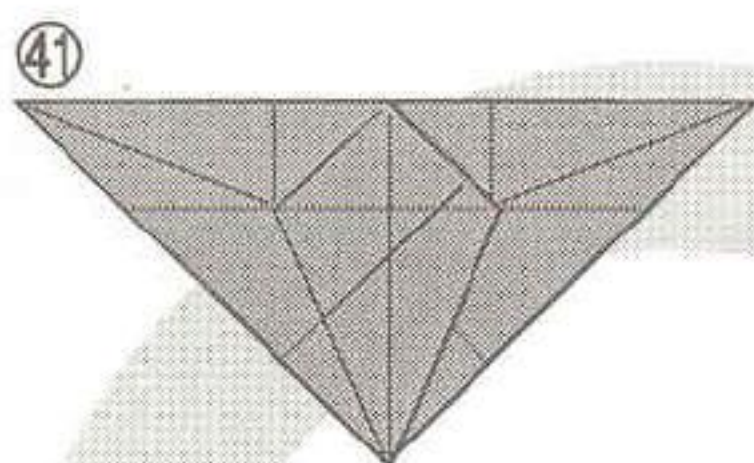
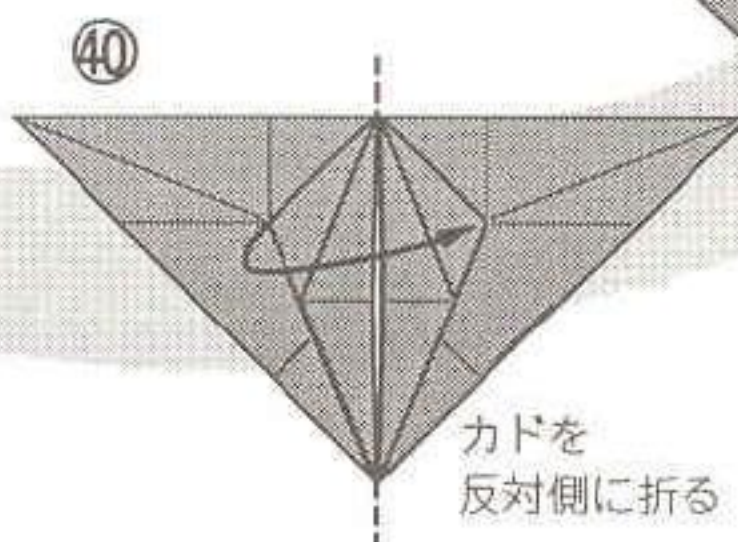
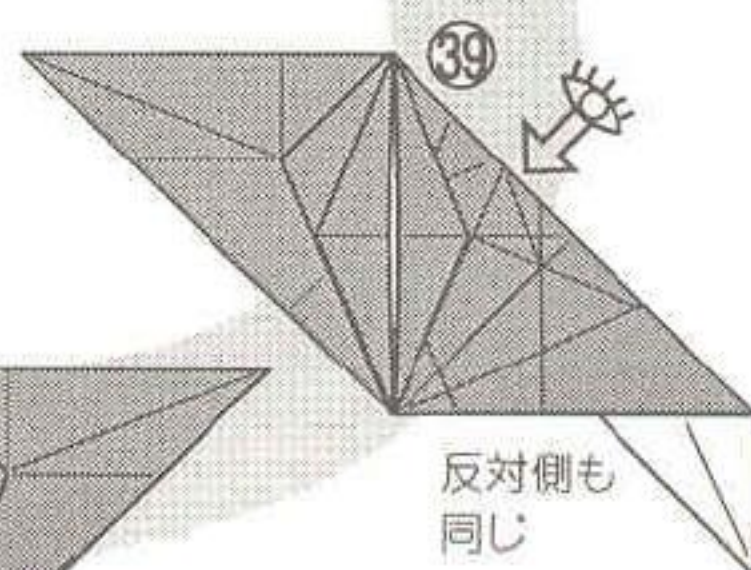
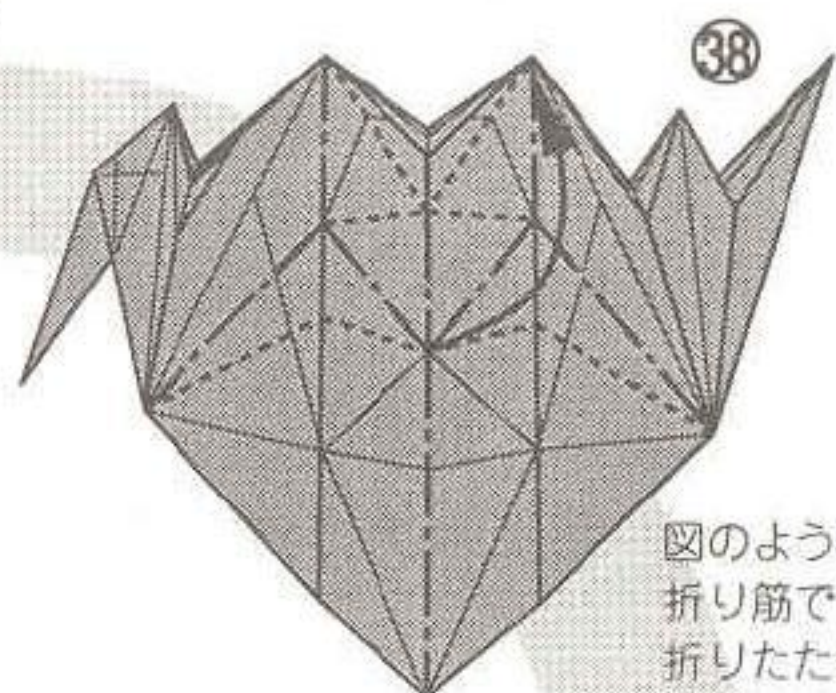
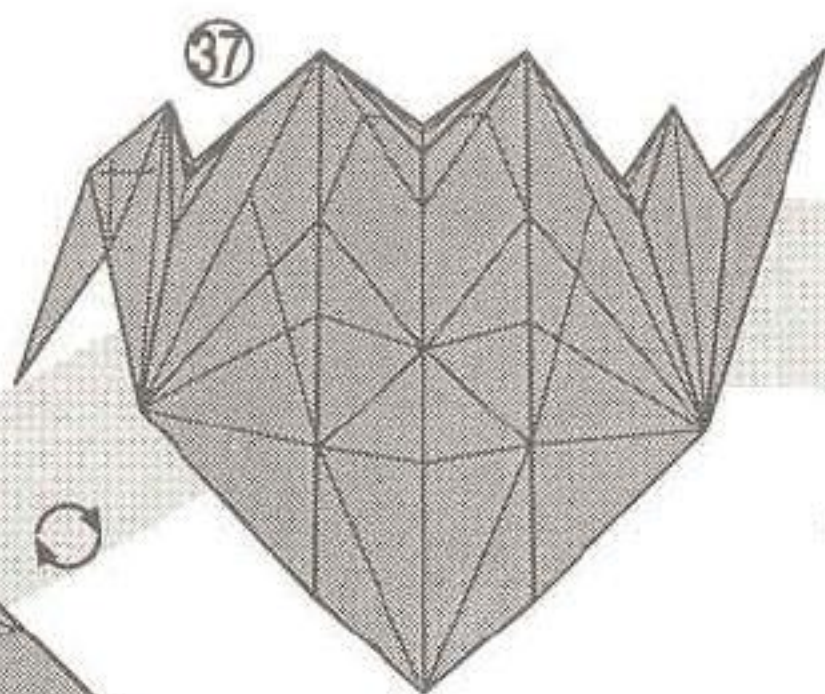
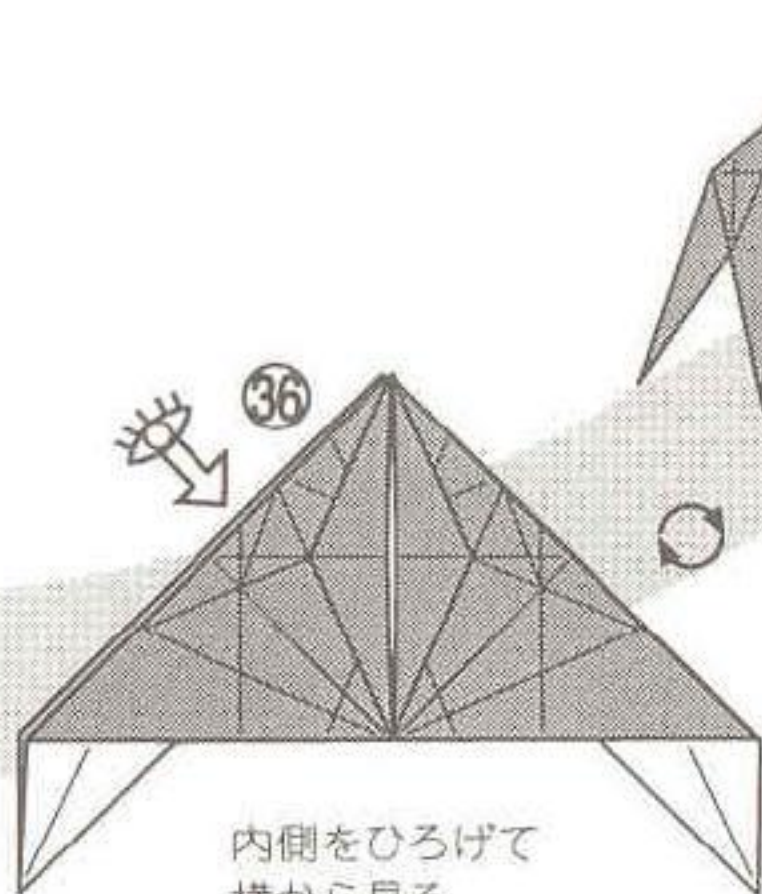
内側を  
ひろげて  
つぶす  
ように折る

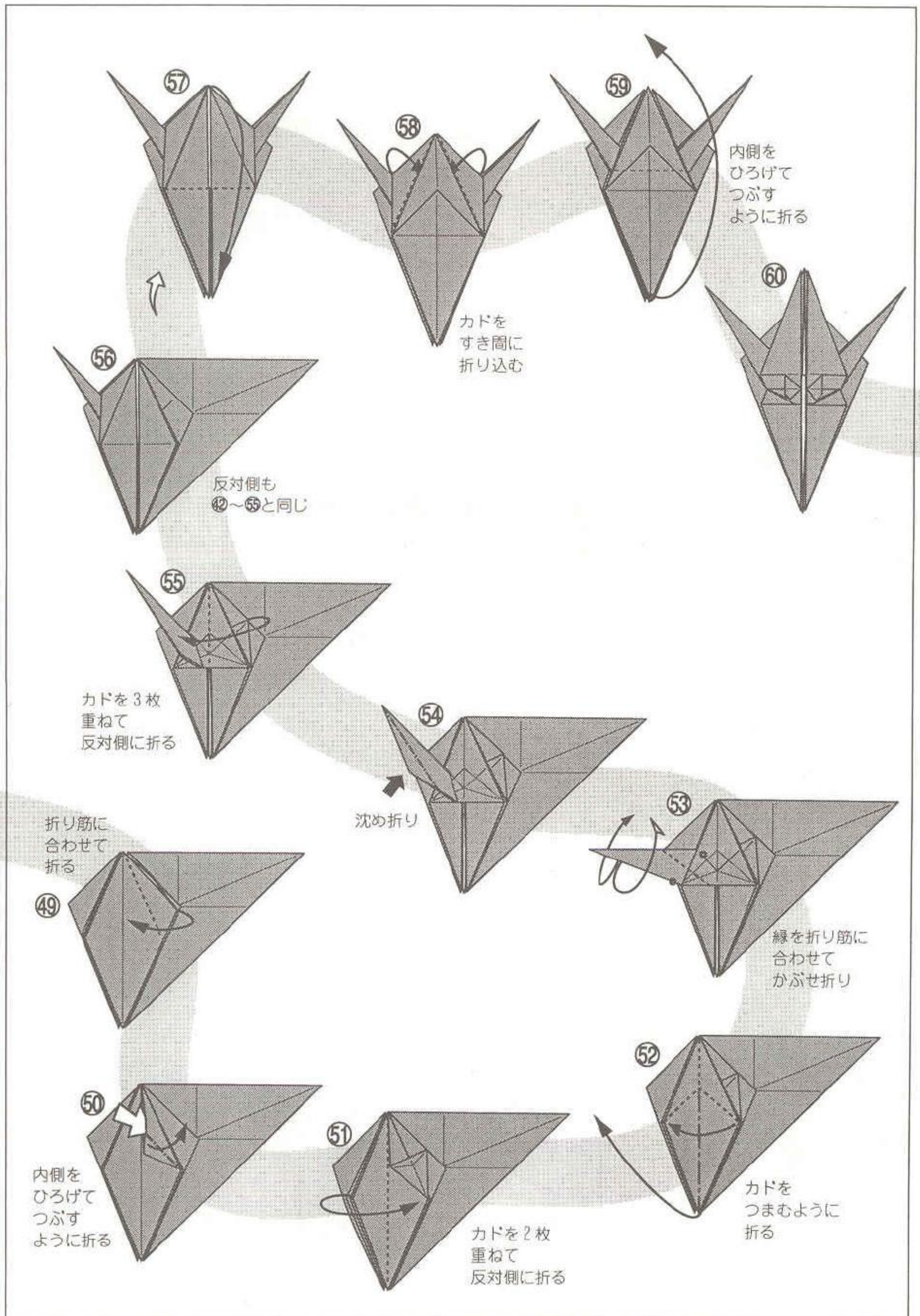


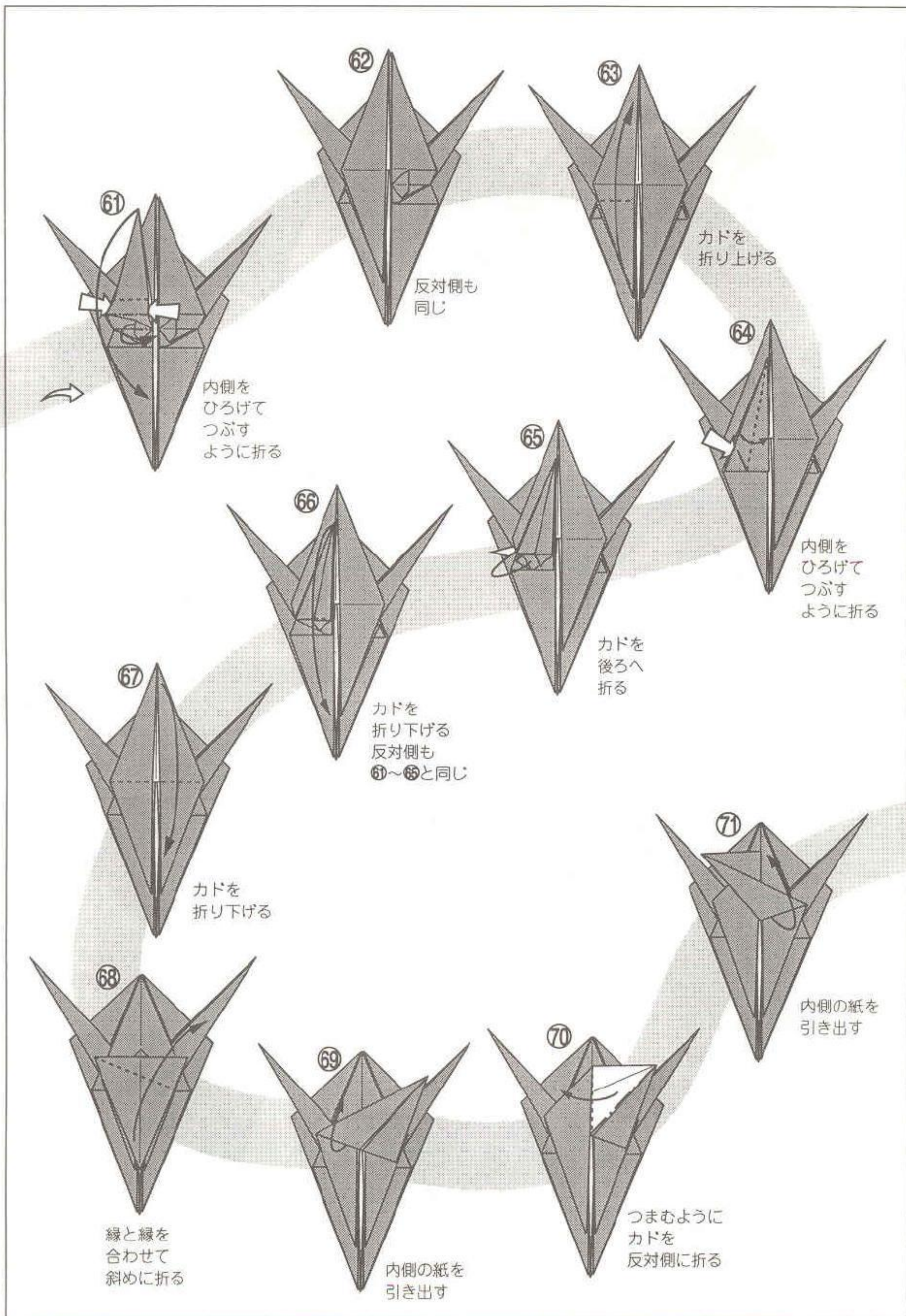
縁と折り筋の  
交点を結ぶ線で折る

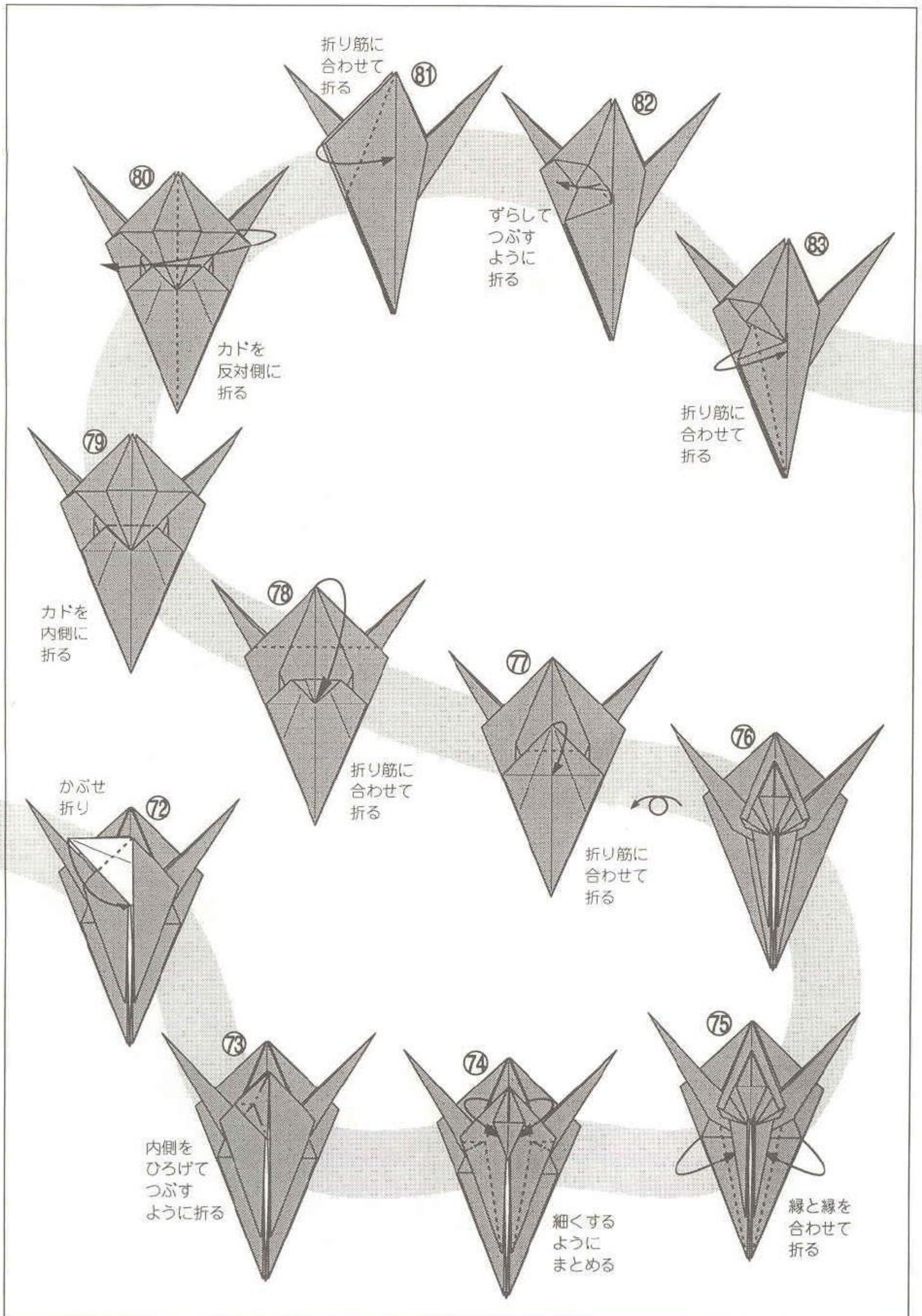


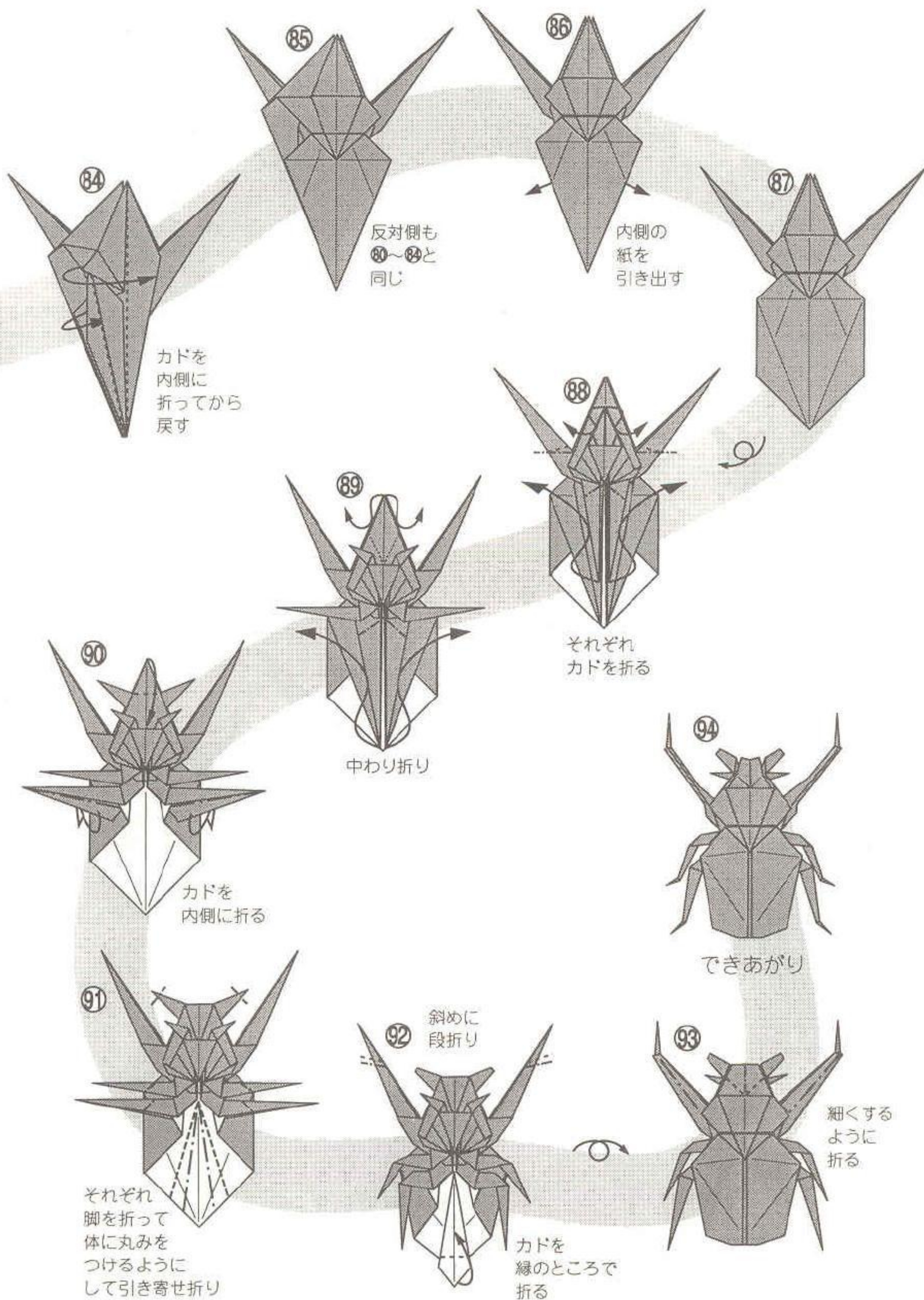












## 折紙探偵団新聞 50号特別企画第1弾

# 折紙探偵団の今後を考える

## 過去と現在の探偵団

■1989年秋、木村良寿、西川誠司、故吉野一生の三氏が、オープンしたばかりの「ギャラリーおりがみはうす」(山口真氏経営)で、「恐竜おりがみ三人展」という展覧会を開きました。展覧会終了後も顔を合わせることが多くなったこの三人は、「このまま終わるのは惜しい。会をつくって活動を継続させよう」と考え、その思いを風とし、山口氏の協力を帆として、「折紙探偵団」を船出させました。

その後、「折紙探偵団」は当初の予想を超えて(!)順調に発展してきました。団員(新聞定期購読者)は海外を含めて700人に達し、マスコミに取材

されることも多く、団員相互の交流によりたくさんの新しいものが生み出されてきました。

そして、現在の折紙探偵団は次のような活動をしています。

○折紙探偵団新聞隔月発行

○コンベンション開催(東京)

○月例会・講習会開催(東京)

○インターネットサイトの運営

○各種イベント開催(吉野氏を偲ぶ会、忘年会など)(東京)

また、地方でのミニコンベンションなども計画されています。活動は充実しているといえるでしょう。

■上記のような現在の折紙探偵団ですが、会の拡張にしたがって、いくつかの問題も指摘されるようになってきました。団員の中には「今が曲がり角である」と考えているひともいます。来年10周年を迎えるにあたり、折紙探偵団が今まで培ってきたものを維持しながら、これをさらに発展させるにはどうしたらよいか、いわゆる「主要団員」の間で議論されることも多くなりました。今回は、そうした議論の一端を報告したいと思います。

まず、現在挙げられている問題点や課題ですが、これには次のようなものがあります。

(1)窓口業務をきちんと一本化し、システムを整備すべきである。

(2)一般の折り紙愛好家への情報提供や交流促進を忘れて閉じこもってはいけない。

(3)一方で、専門性(作家・研究家への場の提供)という特徴を忘れてはいけない。

(4)展覧会開催、出版などの事業展開を進めたい。

### 組織の整備

まず、(1)の「組織の問題」に関してです。現在の折紙探偵団は、組織という言葉が相応しくないほどルーズな組織です。明文化された規約がありません。すべての活動は団員のボランティアで成り立ち、「やりたいひとがやりたいことをやる。探偵団に対して責任感と愛情を持ったひとが雑務も引き受ける」というかたちで運営されていま

す。以下に、実態に即した組織のありようを、キーワードの説明というかたちで書いてみましょう。

団員：折紙探偵団新聞の購読者すべてが団員です。

主要団員：新聞の編集、記事執筆、インターネットサイトの運営、コンベンションの運営、会計、問い合わせへの応答といったことに積極的に参加しているひとたちです。作家性の強いメンバーが多いという特徴を映して、作家は主要団員として暗黙裡に認められています。

団長(西川誠司氏)：会の代表で、例会や主要団員間での話し合いの議長の役割を果たします。

ギャラリーおりがみはうす(代表：山口真氏)：折紙探偵団の窓口が置いてあり、会の運営に有形無形の協力をしています。「おりがみはうす」が探偵団の縁の下の力持ちであることは疑いのない事実です。

例会：東京で月に1回開かれ、約30人が出席します。団の方針を決める唯一の機関です。

以上のようなルーズな組織を整備して、しかも「誰もが自由に参加できる」かたちは維持したい、あるいはそれを促進したい、これが課題です。

さて、最近のことですが、組織の整備の手始めとして、探偵団と「おりがみはうす」の関係に動きがありました。今後、「窓口業務、会計業務等を、ギャラリーおりがみはうすに、正式に

仕事として依頼する」ことにし、試験的にそのように動き始めたのです。「正式な仕事として依頼する」といっても、乏しい会計なので雀の涙です。しかし、このあたりを明確化し整備することはどうしても必要です。そして、さらなる組織の整備は、大きな課題なのです。

### 会の理念と名称

次に(2)の「一般折り紙愛好家へのはたらきかけ」に関してです。徒らに組織を拡大すればよいというわけではありませんが、「折紙探偵団」に内輪受け体質のようなものがあることは否めません。「探偵団」は様々な側面を持っているにもかかわらず、例えば海外からは、「なんやら手の込んだ難しい作品を折っている若い作家の集団であるタンデイダンなるものがある」と思われているだけという面もあるようです。これは、会の名称の問題にも関係しています。「現実問題として折紙探偵団という名称が足枷となるようなケースがある」という意見もあります。今後の発展を考えると、名称の変更は繰り返し話題になります。改名派と名称存続派は5.5:4.5ぐらいでわずかに改名派が多いようです。

(3)の「作家・研究家への場の提供」の問題も重要で、これは、「折紙探偵団新聞」の編集方針にも関わるものです。ページを増やして専門紙と一般紙の両面を持った紙面にするといった案があります。

(4)の新たな事業展開も夢のある話ですが、とりあえずそれはここでは触れずにおきましょう。

### 意見募集

さあ、ちょっと堅い話でしたが、読んでいただけましたか。この新聞の読者であるあなたは、新聞の購読者というだけで、団の運営に参加する権利を持っています。次のようなことについて意見があれば、遠慮なくお寄せ下さい。

(1)名称変更案(思いつきでも)

(2)組織体制案

(3)会の規約案

(4)新規事業案(思いつきでも)

(5)その他・疑問

〒113-0001

文京区白山1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす

折紙探偵団意見募集係

7月15日まで

(M)

折紙探偵団新聞 50号特別企画第2弾

# 折紙探偵団新聞 インデックス

探偵団新聞50号記念第2弾としてインデックスを作ろうということになって、言い出しっぺの私がデータを作成することになった。そろそろインデックスの必要性を感じていたので、早速1号から49号まで積み上げ、号順にデータを入力していったが、予想以上

の量に驚いた。頁数の関係で、主要記事だけになってしまったが、おりすじを誰が書いていて、誰が書いていないかが一目瞭然だったり、色々発見があつて楽しかった。このインデックスが、今後の折紙探偵団新聞の活動の一助になれば幸いです。(隅谷和夫)

## 号:分類:タイトル:題名:作者

- 1::創刊の言葉:木村良寿
- 1::切り込み:折紙批評体系 6号まで連載:西川誠司
- 1::シェフのお奨め品:プロントサウルス:吉野一生
- 1::おりすじ:「なぜ、折るのか」:高井弘明
- 2::シェフのお奨め品:プロトケラトプス:川畑文昭
- 2::おりすじ:「なぜ、折るのか」:岡村昌夫
- 3::折紙異人館:12号まで連載:布施知子
- 3::シェフのお奨め品:はさみ:目黒俊幸
- 3::シェフのお奨め品:のり:西川誠司
- 3::おりすじ:「おりがみ山」:山口真
- 4::シェフのお奨め品:ティラノサウルス:吉野一生
- 4::おりすじ:「折り紙はん、おおきに」:野間正路
- 5::シェフのお奨め品:ブラキオサウルス:川畑文昭
- 5::おりがみ庵:12号まで連載:岡村昌夫
- 6::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの頭骨:吉野一生
- 6::おりすじ:「なぜ、折るのか」:榎本宣吉
- 7::切り込み:実用折紙設計法:12号まで連載、最終回 14号に掲載:目黒俊幸
- 7::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの骨格(下半身):吉野一生
- 7::おりすじ:「折紙と私」:入江尚志
- 8::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの骨格(あばら骨の後半分):吉野一生
- 8::板長のお奨め品:きもの:山口真
- 8::おりすじ:「いつか見た遠い空」:木村良寿
- 9::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの骨格(あばら骨の前半と腕の骨):吉野一生
- 9::板長のお奨め品:ベビーシューズ:山口真
- 9::おりすじ:「獅子の翼、鷲の牙」:木村良

寿

- 10::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの骨格(頸骨):吉野一生
- 10::板長のお奨め品:魚の骨:山口真
- 10::おりすじ:「折り紙に出会ったこと」:西川誠司
- 11::シェフのお奨め品:ティラノサウルスの骨格(尾骨):吉野一生
- 11::おりすじ:「続・折り紙に出会ったこと」:西川誠司
- 12::シェフのお奨め品:マイアサウラ誕生:木村良寿
- 12::シェフのお奨め品:鮭:吉野一生
- 12::おりすじ:「あるフリーターの優雅な生活」:橋高美保子
- 13::切り込み:おりがみ庵 ひとりごと:18号まで巻頭連載。19号から49号まで連載中:岡村昌夫
- 13::シェフのお奨め品:魔女:西川誠司
- 13::シェフのお奨め品:鮭:吉野一生
- 13::おりすじ:「続・あるフリーターの優雅な生活」:橋高美保子
- 14::シェフのお奨め品:十七星てんとう虫:ロバート・J・ラング
- 15::特集 おりがみ日本紀行 ロバート・J・ラング氏の10日間:
- 15::シェフのお奨め品:高機動戦術機F-128D AH-MCA:小南博資
- 15::シェフのお奨め品:カバのタバコいれ:木村良寿
- 15::おりすじ:「芸は身をたすけるか」:田中まさひこ
- 16::特集 おりがみ日本紀行 ロバート・J・ラング氏の10日間 パート2:
- 16::シェフのお奨め品:オートバイー1:吉野一生
- 16::シェフのお奨め品:カバのタバコいれ 下半分:木村良寿
- 16::おりすじ:嬉しいことです:笠原邦彦
- 17::シェフのお奨め品:小鳥:川畑文昭

- 17::シェフのお奨め品:オートバイー1(後編):吉野一生
- 17::折紙探偵団との出会いから:ロバート・J・ラング
- 18::シェフのお奨め品:小鳥(後編):川畑文昭
- 18::シェフのお奨め品:キングドラゴン(前編):木村良寿
- 18::おりすじ:人間と折り紙:笠原邦彦
- 19::折紙博物誌:24号まで巻等連載。25号から30号まで連載:前川淳
- 19::シェフのお奨め品:キングドラゴン(後編):木村良寿
- 19::シェフのお奨め品:'93千支の鳥:笠原邦彦
- 19::おりすじ:はじめまして、川崎です:川崎敏和
- 20::シェフのお奨め品:かぶとむし オス前編:西川誠司
- 20::シェフのお奨め品:奴:堀口昌哉
- 20::折紙設計プログラム起動:
- 20::おりすじ:カミに祈る私:山梨明子
- 21::シェフのお奨め品:かぶとむし オス後編:西川誠司
- 21::デビッド・ブリル氏来日歓迎パーティー:西川誠司
- 21::シェフのお奨め品:ユニコーン(前編):川畑文昭
- 21::おりすじ:天馬とともに:北條高史
- 22::シェフのお奨め品:かぶとむし メス:西川誠司
- 22::シェフのお奨め品:ユニコーン(後編):川畑文昭
- 22::板長のお奨め品:きんさんぎんさん:土戸英二
- 22::おりすじ:仮面世界のとりこ:西村修
- 23::シェフのお奨め品:ハルク・ホーガン:木村良寿
- 23::シェフのお奨め品:ワニ(その1):川畑文昭
- 23::シェフのお奨め品:鉢植えのサボテン:デビッド・ペティ
- 23::おりすじ:もっと時間を:中西健一
- 24::5 min. origami:はりねずみくん:Kikou Takada
- 24::シェフのお奨め品:馬 その1:吉野一生
- 24::シェフのお奨め品:ワニ(その2):川

- 畑文昭
- 2 4 :: おりすじ: 引っ越しと折り紙マニア  
のおばさん: 本位田那穂美
- 2 5 :: 折紙設計夜話: 30号まで巻頭連載:  
川畑文昭
- 2 5 :: 5 min. origami: かぶとむし胸像: Kikou  
Takada
- 2 5 :: シェフのお奨め品: 馬: 吉野一生
- 2 5 :: 探偵団冬のニューヨーク紀行::
- 2 5 :: おりすじ: 私にとっての折り紙: 久代  
一二
- 2 6 :: シェフのお奨め品: カミキリムシ (前  
編): 西川誠司
- 2 6 :: シェフのお奨め品: 不切正方形一枚  
折ティラノサウルス全身骨格 第1  
回: ロバート・J・ラング
- 2 6 :: おりすじ: 「蒐集癖」について: 鈴木  
雅子
- 2 7 :: シェフのお奨め品: カミキリムシ (後  
編): 西川誠司
- 2 7 :: シェフのお奨め品: 不切正方形一枚  
折ティラノサウルス全身骨格 第2  
回: ロバート・J・ラング
- 2 7 :: にゅーよーくニューヨーク  
New York: 前編: 川崎敏和
- 2 7 :: おりすじ: 作風ということ: 田中稔憲
- 2 8 :: 学食おすすめメニュー: 雪の結晶: 北  
條高史
- 2 8 :: シェフのお奨め品: 不切正方形一枚  
折ティラノサウルス全身骨格 連載  
第3回: ロバート・J・ラング
- 2 8 :: シェフのお奨め品: ムース 連載第  
1回: ジョン モントロール
- 2 8 :: にゅーよーくニューヨーク  
New York: 後編: 川崎敏和
- 2 8 :: おりすじ: 私が名探偵になった理由:  
和久敦也
- 2 9 :: シェフのお奨め品: ムース 連載第  
2回: ジョン モントロール
- 2 9 :: うさぎ: 土戸英二
- 2 9 :: おりすじ: 二人目の羽鳥: 羽鳥公士郎
- 2 9 :: おわびと訂正とお願い: 28号雪の  
結晶訂正: 北條高史
- 3 0 :: BABY T-REX: 山梨雅弘
- 3 0 :: バンダ: 山田勝久
- 3 0 :: シェフのお奨め品: スピノサウルス  
「前編」: 吉野一生
- 3 0 :: マイケル・シャルさんの急逝を惜し  
む::
- 3 0 :: おりすじ: エッ、またなの?: 山梨雅  
弘
- 3 1 :: 折紙研究ノート: 36号まで巻頭連  
載: 鈴木邦夫
- 3 1 :: 折紙辞典: 49号まで連載中: 前川淳
- 3 1 :: えぞしか 連載第1回: 川畑文昭
- 3 1 :: シェフのお奨め品: スピノサウルス  
「後編」: 吉野一生
- 3 1 :: 第1回折紙探偵団コンベンションレ  
ポート: 前川淳
- 3 1 :: おりすじ: 魔女屋敷で見た夢: 飯沢秀  
幸
- 3 2 :: 今月の給食: 洋式便器: 木下剛
- 3 2 :: えぞしか 連載第2回: 川畑文昭
- 3 2 :: おりすじ June Bride篇: おりすじを  
つける前に: 松下直子
- 3 2 :: おりすじ: 折り畳まれた記憶: 前川淳
- 3 3 :: こてこて土戸のこなもん定食: ヨー  
クシャ・テリア: 土戸英二
- 3 3 :: やまだ監督の日の丸弁当1: ながす  
くじら: 山田勝久
- 3 3 :: やまだ監督の日の丸弁当2: ネッ  
シー: 山田勝久
- 3 3 :: えぞしか 連載第3回: 川畑文昭
- 3 3 :: おりすじ: わが家のオリキチ: 野中陽  
子
- 3 4 :: シェフのお奨め料理: 壁の上のトカ  
ゲとハエ (前編): ヘルマン・ヴァ  
ン・グーベルジャン
- 3 4 :: シェフのお奨め料理: 3D cube  
illusion: ニック ロビンソン
- 3 4 :: シェフのお奨め料理: 3D House:  
ニック ロビンソン
- 3 4 :: 折紙探偵団いきなりツアー'95: ぶり  
てん道中記 前編: 北條高史
- 3 4 :: おりすじ: TVの国からキラキラ: 笹出  
晋司
- 3 5 :: シェフのお奨め料理: 壁の上のトカ  
ゲとハエ (後編): ヘルマン・ヴァ  
ン・グーベルジャン
- 3 5 :: シェフのお奨め料理: ねずみ: 山口真
- 3 5 :: 折紙探偵団いきなりツアー'95: ぶり  
てん道中記 後編: 北條高史
- 3 5 :: おりすじ: 有楽町であいましょう: 佐  
藤暁子
- 3 6 :: おたくの部屋: ガメラ: 笹出晋司
- 3 6 :: 手描き折図のススメ: 山梨雅弘
- 3 6 :: 今月の季節料理: おひなさま: 西川誠  
司
- 3 6 :: おりすじ: おりがみ術入門: 吉野一生
- 3 7 :: 折紙の哲学: 42号まで巻頭連載。  
44号から隔号(46、48)掲載中:  
羽鳥公士郎
- 3 7 :: 翔ぶトノサマバッタ: 西川誠司
- 3 7 :: しまうま: 川畑文昭
- 3 7 :: おりすじ: 特技から趣味へ: 宮島登
- 3 8 :: しまうま (後編): 川畑文昭
- 3 8 :: ベビーアバトサウルス: 高井弘明
- 3 8 :: たがめ: 世浪健
- 3 8 :: おりすじ: 「祖母に捧げる晩作」: 渡辺  
明広
- 3 9 :: ゴジラ: 西川誠司
- 3 9 :: 鹿: 宮島登
- 3 9 :: 第2回折紙探偵団コンベンションレ  
ポート:
- 3 9 :: おりすじ: 元旦の便器: 川上理子
- 4 0 :: 鹿 (第2回): 宮島登
- 4 0 :: F-15 イーグル 第1回: 吉野一生
- 4 0 :: 追悼・吉野一生さん::
- 4 0 :: おりすじ: 私の趣味: 近江信一
- 4 1 :: F-15 イーグル 第2回: 吉野一生
- 4 1 :: ブテラノドン: 木村哲夫
- 4 1 :: 熊と鮭: 山田勝久
- 4 1 :: おりすじ: 私の野望: 小林卓夫
- 4 2 :: F-15 イーグル 第3回: 吉野一生
- 4 2 :: イルカ: 山梨雅弘
- 4 2 :: 丑: 土戸英二
- 4 2 :: おりすじ: 折紙ビギナー回想録: 木村  
哲夫
- 4 3 :: 折り紙の幾何学: 48号まで巻頭連  
載: 川崎敏和
- 4 3 :: 糸きりばさみと糸巻き: 山梨雅弘
- 4 3 :: リボンベル: 北條高史
- 4 3 :: 吉野一生さんを偲ぶ会::
- 4 3 :: おりすじ: 赤い暴君竜: 田村菜穂子
- 4 4 :: トラ: 小松英夫
- 4 4 :: ドラゴン: 北條高史
- 4 4 :: おりすじ: 創作の進行形: 小松英夫
- 4 4 :: 訂正とお詫び: 「リボンベル」訂正
- 4 5 :: トラ (第2回): 小松英夫
- 4 5 :: なきうさぎ: 山口真
- 4 5 :: 特別寄稿: エッシャー繰り返し模様  
と折紙: 伏見康治
- 4 5 :: おりすじ: 「悪魔の囁き」: 福島邦幸
- 4 6 :: トラ (第3回): 小松英夫
- 4 6 :: 飾り切りしたゆで卵: 川崎敏和
- 4 6 :: 和傘: 川崎敏和
- 4 6 :: 菊: 川崎敏和
- 4 6 :: おりすじ: コンプレックスコンプ  
レックス: 新本祐一
- 4 7 :: 道化面: 小松英夫
- 4 7 :: 魔女: 渡辺大
- 4 7 :: おりすじ: 「変則的複合折紙夜話」: 濱  
田隆幸
- 4 8 :: フタコブラクダ: 川畑文昭
- 4 8 :: おりすじ: 折紙と音楽: 丹呉岳春
- 4 8 :: 挟み込み別紙: 変形折り鶴基本型の  
展開図:
- 4 9 :: 折り紙という方法: 巻頭連載中: 北條  
高史
- 4 9 :: ピラミッド形ケース: 川崎敏和
- 4 9 :: ネコ: 西川誠司
- 4 9 :: みみずく: 小松英夫
- 4 9 :: 止まり木: 笠原邦彦
- 4 9 :: おりすじ: 探偵団との出会い: 綿田治  
紀

3年ぶりのお目見えです

## 探偵団会員データ

1998年4月17日現在



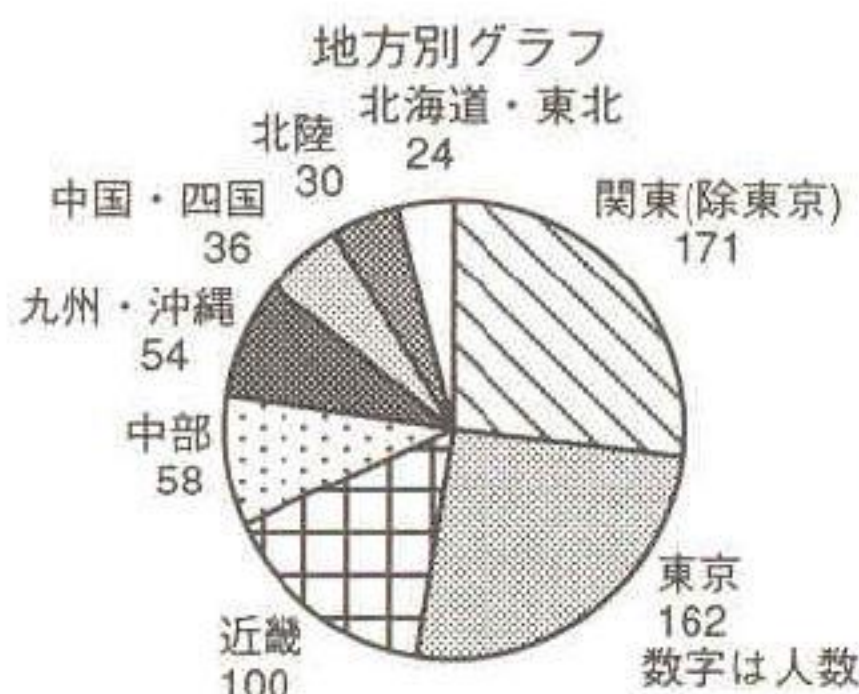
今までは明記していませんでしたが筆者は木村良寿

久々の探偵団会員データです。4月17日（前号の発送日）現在で9期及び8期（継続してね）の会員679人を対象とします。

この集計を初めて行ったのが92年4月の第13号で、当時の会員は243人でした。その後26号（94年6月、329人）、33号（95年8月、408人）にも掲載されていますので比較していただくのも御一興かと思います。あ、13号と26号は品切れか。

## 1. 現住所（国内635人、海外44人）

地方別ではやはり関東及び東京が最も多いのですが、徐々にその比率が減ってきています。13号で67%だったのが52.4%になってしまいました。その反面、増えた地方は九州・沖縄です。昨年11月の九州コンベンションのおかげでしょう。



都道府県別で多い順に挙げますと、当然1位は東京で162人。ですが、以前は全国の30%以上だったのが今では25.5%です。

以下トップテンは2位神奈川66人、3位埼玉45人、4位大阪37人、5位千葉30人、6位兵庫25人、7位静岡20人、8位愛知と茨城18人、10位福岡15人です。逆に少ない県は山形・山梨・秋田・島根が2人、愛媛・岩手・青森が1人だけです。13号の時は15もあった会員がいない県はとうとう

宮崎のみとなりました。九州のみなさん、よろしく！

海外の会員は44名で、この内海外在住の日本人は5人。国別ではアメリカ19人、イギリス・カナダ・スペインが各4人、香港・ドイツ各3人、台湾・ポルトガル各2人、マレーシア・フィリピン・フランス各1人でした。

## 2. 生年月日（579人中）

最も多いのが1962年で19人、次が84年18人、51年と67年15人です。10～14年の年は沢山あります。最年長はみなさんご存じの伏見康治先生（09.06.29）、最年少は愛知県の今川信亮くん（90.10.13）でした。

年代別構成はグラフをご覧ください。年齢は98年12月31日での満年齢。10代前半というのは10才から14才まで、10代後半は15才から19才です。予想通り30代、40代が多いのですが、気がかりなのは20代前半が少ないこと。3年前の33号で「10代後半が少ない」と言っていたのがそのまま増えていないようです。ここ2、3年小中学生の会員が増加傾向にあるのですが、10代前半が多いことは将来の希望が持てそうです。

今回も双子を発見しました。連載

でおなじみ羽鳥公士郎・近藤智秀（72.12.11）、市川香・前島美恵子（56.2.13）の2組です。

## 3. 性別（677人中。性別のない会員もいるんだよ、上越科学館とかね。）

男436人、女241人。男が64.4%。これが26号では63.3%でした。コンベンションの様子では最近では女性が増えてきたかな？と置いていたらとんでもない、ほとんど比率は変わっていないじゃないですか。実はコンベンションには何度も参加しても、会員にはなっていない、という女性は何人かいますし、小学生の息子さんの付き添いで参加するお母さんも多いのです。

## 4. その他

インターネットやパソコン通信の電子メールアドレスを持っている人がなんと115人もいました。17%にもなる訳ですか。たぶん、世間一般の普及率よりは高いんじゃないかな。海外在住者は44人中なんと19人！（43%）すると国内だけなら15%か。それでも多いね。

昔やってた折紙協会会員とか血液型とかの集計はもうやめました。



## 折り紙の銭学考<sup>神戸</sup>

私は作品を売っています。折り紙界で制度が確立されていないため、売れる作品は今のところ、自分の創作物に限定しています。参考までに今まで売れた例をあげますと、材料、箱代込みで1200円～15万円まで色々です。高いですか？安いですか？

値段はずいぶん悩みました。弁護士さんに相談したところ、市場原理にのっとった商品なので、1円でも1億円でも相手がそれでいいというなら、法律上は好きな値段をつけてよいということでした。作品が高く売れば、私としても生活が助かるのでありがたいことです。が、一番の悩みどころは、業界の意識として「将来、折り紙界はどの方向に進みたいと思っているのか？」というのが良く分からない点です。絵や彫刻と同様な芸術分野として確立したいなら、私はもっと高い値段をどんどんつけて、「折り紙作品はこれだけの価値のあるものだ」ということを、市場に対してアピールしていこうと思いますし、人類共通の無意識レベルの共有財産だ(!)とでもいうのでしたら、利潤を“一切”排除して、ボランティアに徹するべきでしょう？(理想論が脆弱なのは、イヤというほど見てますよね)

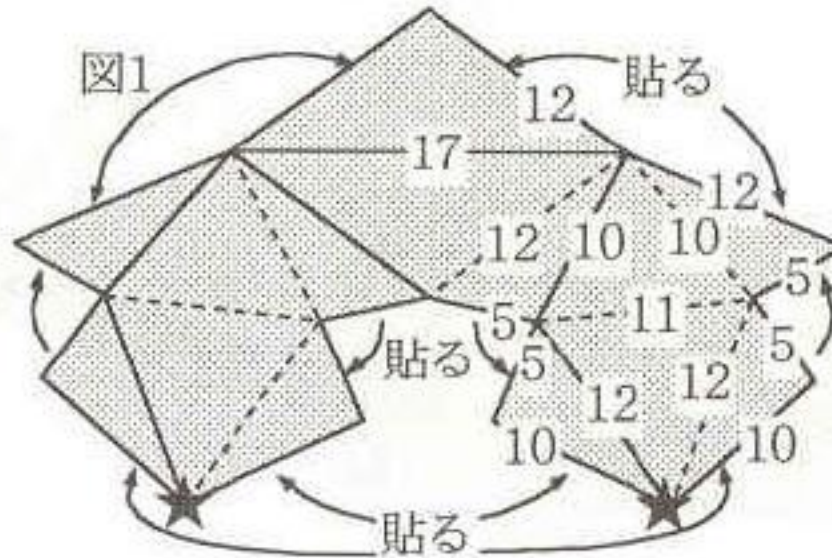
現在の折り紙界がわりとボランティアっぽいニュアンスになっているのは、プロが少なすぎるからだと思います。もちろん、現状では折り紙だけで食べていける状況ではないので、本業は必要ですが、気持ちだけでもプロの造形作家を自覚する人が増えてくれれば、かなり変わってくるはずです。今までは作家本人に直接たのんで入手するしかなかったものを市場で買えるとなれば、売る方にも買う方にもかなり有意義なのではないと思います。リスクもあります。

折り紙は複製が割と簡単に作れるという特徴があるので、似た分野(音楽、写真、マンガ等)の制度を参考にしつつ、独自のルールを、かなり早急に確立する必要があるでしょう。企業や個人商が折り紙に巨大な市場価値を認め、土足で踏み込んでくるその前に。(川村みゆき)

## 研究紹介(2)

横浜

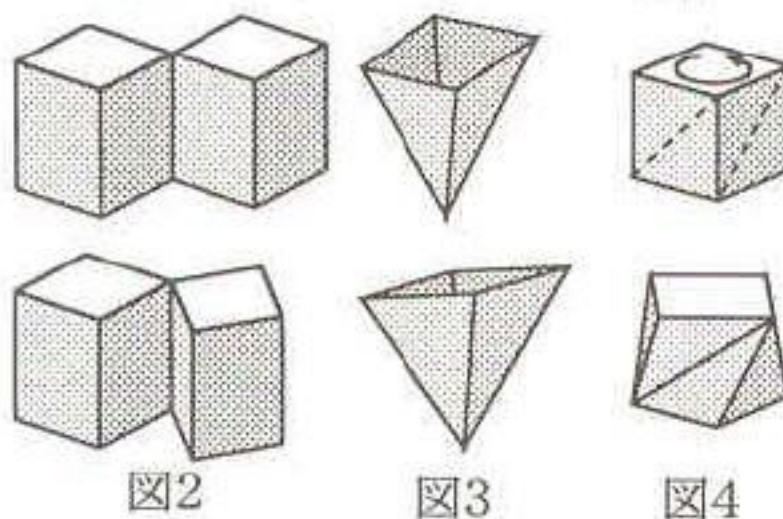
伏見先生が不思議な多面体についての記事(科学雑誌Science)を送ってくださいました。図1が展開図です。不思議なのは★印のカドが動く点です。直方体を辺でつなぎあわせたもの(図2)



や側面だけの四角錐(図3)も変形します。しかし前者は内部の空間が2つに分かれているので1つの多面体ではありません。後者は底をつけると変形しません。▼立方体はねじり折り(図4)で形を変えますが、途中で面がフラッ



トでなくなります。不思議な立体は面の平坦性が保たれたまま変形するので、コンパスで正確に作図して組み立てて確認してみてください。(編)



## Stone-like paper

Herman van Goubergen makes his "Man reading news paper" by use of stone-like paper. He makes it by XEROX machine. It has a weak point. Printing is easy to be off. "Sumi" is a Chinese black ink. Mixing it with salt, we get "stone-like ink".

## 石紙

佐世保

以前紹介した陶紙の新種ではありません。ハーマン・ヴァン・クーベルジャンさんの代表作「新聞を読む人」はコピー機を利用して作った石の質感を持つ紙で折られています。電源を入れてすぐ原稿無しでコピーをすると、寝ぼけ状態の機械は原稿の情報を正しく複写できずに石の質感の模様を印刷するのだそうです。▼ただこの紙には欠点があります。トナー(粉末インク)が紙の表面に焼き付けられているだけなので、折り目が白くなります。▼高校化学で「コロイド」なるものを学習します。加藤さん、初音さん、本位田さん、三輪石嶮と同時代の化粧品のCMでコロイド硫黄配合ロゼット洗顔パスタというのがあったのを覚えてませんか。これは硫黄が微粒子になって水に溶けたものですが、食塩を溶かしたのとは違い、微粒子なのにナトリウムイオンなどよりずっと大きくて、かろうじて水分子に取り囲まれて溶けている状態です。マヨネーズ、墨汁、煙草の煙などもコロイドです。粒子がもう少し大きくと、泥水のように、時間が経つと粒子が分離(沈殿)します。▼墨汁の場合、表面に正の電荷を持つ炭素の微粒子(コロイド)を負の電荷を持つニカワの超微粒子が取り囲んでいます。水分子と相性がよいニカワのおかげで、炭素微粒子は水に溶け込むことができます。▼ところが墨汁に食塩水を混ぜると、ナトリウムイオンがコロイドの電荷を中和するため炭素粒子がくっつき大きくなって沈殿します。この現象を「コロイドの凝析」といいます。▼このように凝析させた墨汁で紙を染めると石の質感を持つ紙ができます。にかわが糊の役目をするので炭素粒子は簡単にははがれません。食塩の濃度、放置時間で質感は変えられます。身近な材料で簡単にできるので、一度石紙を作っているいろんな作品を折ってみませんか。(川崎敏和)

第1回折り紙の科学国際会議論文集(1万円)を数冊入手しました。連絡先 857-1183佐世保市沖新町1-1 佐世保高専 川崎敏和 0956-34-8443

# Rabbit Ear つまみおり

海外のコンベンション参加や若手作家の人的交流など、世界との間が近くなってきてたと肌で感じるこの頃。若手の成長を物語るようだ。

今年も熱い2日間

7月25(土)～26(日)

## 第4回折紙探偵団 コンベンション98 迫る

いよいよ折紙探偵団コンベンションが迫ってきた。前号でお伝えしたように、今年も東洋大学(東京都文京区白山)を会場に7/25(土)・26(日)の両日、折り紙づくりの2日間だ。現在、30名以上の講師陣がエントリーしている。予定されている企画・プログラムをご紹介します。

### ■プログラムトピックス■

#### 1. 充実の全体講演2本立て

富山大学教授、鈴木邦雄氏による全体講演は、「オトシブミ・虫が折る折り紙」。卵を生むためにオトシブミがつくるゆりかごは、葉っぱを巧みな技で折りあげた見事な折り紙であった。また、昆虫の羽の中にも折り紙が潜む。など美しいスライドを交え楽しいお話を聞かせてもらえそう。更に今回は、布施知子氏には世界の折り紙事情を紹介していただける。本誌でも連載されているように、盛り上がるフランスをはじめ、海外の折り紙作家の最新作品などが見られる楽しい講演。鈴木氏は一般講習では「雪華」を。

#### 2. 海外招待作家

ジェレミー・シェイファー氏  
第2回吉野一生基金招待作家は、アメリカからジェレミー・シェイファー氏。ジャグリングの大道芸人としての顔を持つシェイファーさんの折り紙教室は、パフォーマンスを交えた本当に楽しいエンターテインメントだ。この教室に参加できた人は

間違いなく幸運の持ち主だろう。

#### 3. 恐竜・怪物あり

折紙探偵団の定番のひとつ。木村哲夫氏、山梨雅弘氏、西村修氏がそれぞれ恐竜、ゴジラ、ウルトラセブン。宮島登氏が「ほうきに乘った魔女」。また、最年少講師・安西真君がエイリアンよりフェイスハッガーなどを教える。

#### 4. 弥勒菩薩が折れる

3月におりがみはうすで開いた北條氏の初個展では、思わず手を合わせる人が続出との噂。北條氏入魂の「弥勒菩薩」をいったい何人が折りこなすことが出来るだろうか。

#### 5. 折紙は正方形だけではない

突き詰めると折り紙が正方形である理由は、どんどん希薄になってくる。前回、ティーバック用紙で魅力的な変則用紙の世界を見せてくれた前川氏。今度は一挙5本立てだ。

#### 6. 乗り物がずいぶん

### 宿泊希望者はお早めに

●本郷・鳳明館別館1泊朝食つきで6,500円(税別)。朝まで折り紙につき合えない方でも大丈夫です。ちゃんとおやすみできます。



#### エントリーされてます

中島進氏が新幹線、川崎氏が機関車トーマス、そして緑の下の方持ちレールと信号機はご存じ木下一郎氏。

#### 7. 充実のコンベンション 折り図集 vol.4

今年も講習作品を中心に集めた折り図集を出版する。吉野一生氏の手書きの遺稿も掲載予定。定価1500円の予定です。

#### 9. 盛り上がる懇親会

楽しいゲームで盛り上がる懇親会。参加費は、大人4,500円、中学生3,500円、小学生2,500円が必要です。

#### 8. 今年も朝まで折り紙

懇親会後の宿泊ということもあって、1日の興奮をそのままに朝まで続く折り紙談義。体には充分気をつけて下さい。

### 参加者募集

この「第4回折紙探偵団コンベンション」への参加者を募集しています。折り紙が好きな方ならどなたでも大歓迎です。ただし、小学生以下のお子様にはなるべくご父兄の方のご同伴をお願いします。参加費は2日間で4500円です。ただし、小学生以下のお子様にはなるべくご父兄の方のご同伴をお願いします。ご家族での参加には、保護者1名につきお子さま一人2500円の親子割引があります。1日だけの参加でも割引はございませんのでご了承下さい。参加希望の方は、事務局まで参加の旨をご連絡下さい。

## 折紙探偵団 マーク? Part.2



探偵団にマークが欲しいという前号の記事をみて、というわけではないのだが、

以前からこのことで相談していた海老名市の小野浩さんからファックスでいくつかの案が届いた。(3案とも小野氏)小野さんは大手ゲーム機の会社に勤めるデザイナー、忙しい時間を割いて送ってくれました。皆さんの御意見、また、別の案などがあつたら事務局へお寄せ下さい。

前回紹介した北條高史氏のエアメールは、第4回折紙探偵団コンベンションの記念バッチ

のデザインとして使用されることが決まりました。



## 小松政夫君ニューヨークからご招待

海外との交流が活発になってきている、一つの要因として、探偵団の活動が高く評価されていることがあげられる。中でも若手折紙作家のデザインは、特に興味を惹かれるようである。

3月に ORIGAMI USA からコンベンションの招待状が届き、若手折紙作家一人を推薦してくださいとの依頼があった。数人の候補の中から代表として小松政夫君が選ばれて、招

待を受け、ニューヨークへ行くことになった。

小松君は、本誌誌上でも作品や、漫画が紹介されているので、今更言うまでもなく、実力はおわかりとおもう。彼はまだ大学生。これから先が楽しみな青年だ。

また、彼とは別に今回 ORIGAMI USA のコンベンションに探偵団のメンバー9名が参加する。みやげ話が楽しみだ。

## 「球体と遊ぼう」

人形玩具学会の総会が7月4、5日に東京千駄ヶ谷のフジタ・ヴァンテで開かれますが、5日(日)の1時30分から3時30分まで、会場2階において「球体」の玩具で遊ぶワークショップが開かれます。(無料)折り紙も「くす玉」で参加しますので、お近くの方は遊びに来て下さい。

(岡村)

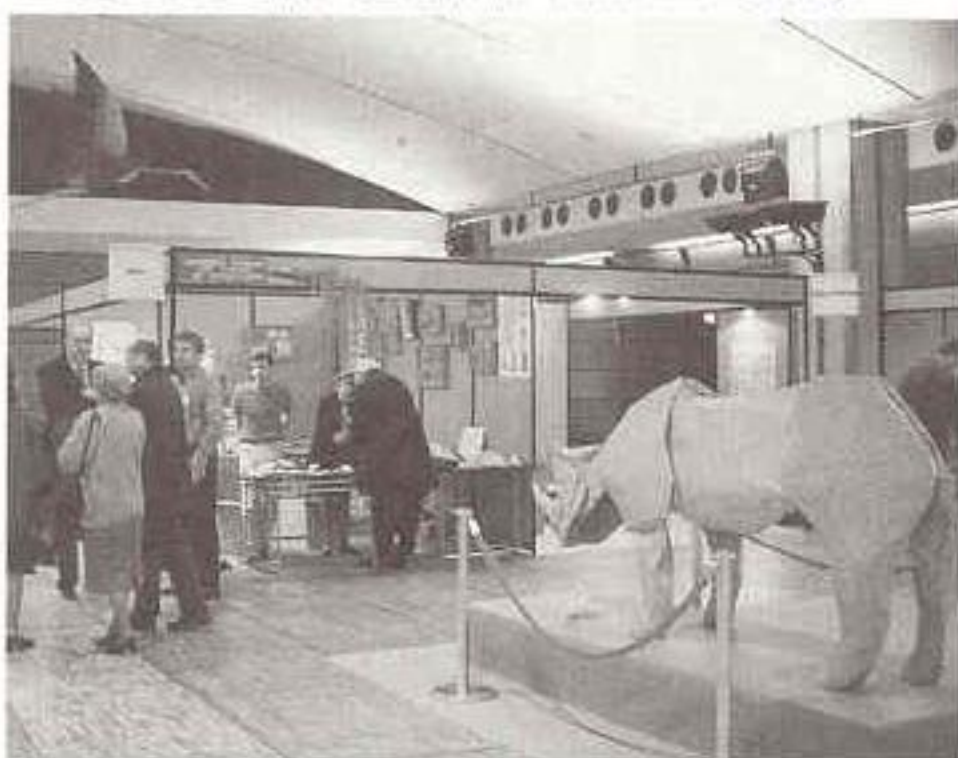
## パリ・オリガミ報告 NO. 2

布施知子

「パリ・オリガミ」の展示会場に、折り紙テクノロジーはめざましく広がっていた。昆虫、動物などの形態模写折り紙はさながら百花繚乱。テクノロジーはテクノロジーだけに伝播が早いということか。実物そっくりはもういくらでもある。今後は「個性」か「オタク化」か、いずれの道をいくのであろうか。しかし不切正方一枚折りによる極限までの形態模写を命とするのが、折り紙の一つの牙城であるのはまちがいない。

目立ったのはプロとして立つフランス人作家達だった。鱗のようなタイヤの溝のような連続模様を絨毯のように広げてみせるジャン・クロード。紙の重なりをグロテスクにまたユーモラスにトカゲやクモに移したり、動きをとらえた一連の造形をみせるベソン・フロデュレーア。紙を粘土のように扱い頭像に仕上げるエリック・ジョワゼル。軽快なデザインのディディエ・ポーサン。彼らの作品の前で折り紙の禁じ手をうんぬ

▼会場に飾られた前川作品。折りはエリック氏



んすることはもはや無意味である。彼らの姿勢にオリガミ・ヌーボーの息吹を感じた。またカンボジアの難民でパリで折り紙のプロとして立ちはじめたジェラード・Sovann (どう発音するのか何度聞いても良くわからなかった) は、静かな語り口で観客に話しかけながら一人でジャンボを折るという興行ももすれば、一方でミニや不切正方一枚折りにも技をみせて、観客の心をつかむすべを心得ていた。日本でも見られないタイプのプロだ。イギリスのポール・

ジャクソンは、紙の質と、色合いに気を配った、植物の種のようなウイルスのような器を多数発表していて一目を引いた。

総じて、日本では折り紙ではないと排除されるような作品が、会場にちがった空気を吹き込み、折り紙の世界をより豊かにしていたように思う。また彼ら折り紙に頂点を引き上げる作家がいる一方で、底辺を広げる働きをしている MFPP の会員、またフランスに住み日本人文化一般を伝える日本人の影の力も大きい。折り紙がもうれつな勢いで世界に伝わっていく現場に居合わせた興奮のなかに、伝統が無いからこそその伸びやかさを感じた。

斬新なオリガミ・ヌーボーが並ぶ会場で折り紙展特有の講習会風景には心がなごんだ。この電子スピード時代に、手から手へ折り方を伝授するという素朴さ。講師の手元と自分の手元を見ている人々のなんと無心なことか。しかし手から手へと伝わっていく過程で創作者名が抜け落ちていくという現実、自身作家として痛し痒しのところである。

折り紙の普及に尽力した先人たちの積み重ねもあり、折り紙はもう日本のお家芸ではない。

# おりすじ

## ユニット領 からの眺め

川村みゆき

本格的にユニットの創作を始め、もう9年になる。小学生の頃は図書館で折り紙の本を片っぱしから借りて折っていた。生物が好きだったが、折り紙に関しては、当時は今程出版物が多くなかったこともあって、特にジャンルは決めずになんでも折った。4年間のブランクの後、大学で、その後のユニット人生を決定する出会いがあった訳だが、その辺の事情は「多面体の折紙」に書いたのでここでは省く。

95年にこの本が出てから、自作品が人の目に触れる機会が随分増えた。沢山の人に見てもらえるのはとても嬉しい反面、恐ろしくもある。生半可なものは提示できないという状況は、良くも悪くもプレッシャーとなる。

人に自分の作品を見せるにあたって、常々感じていることがある。作品に対する反応に、強い性差があるように思えるのだ。ユニット作品というのは、御存知のように、大半が

幾何造形である。折り紙経験者か否かを問わず、女性に見せた場合はほとんどすべての人が興味を持ち、好ましいという印象を持つのに対し、男性は、ほとんどの人が幾何造形に関しては特に何の感情も持っていないように思われる。稀に幾何造形が好きだという男性に出会うが、そういう人は大抵の場合、もはや素人の域ではない。難しいことは知らないけれど、多面体とかモザイクとか、とりあえずけっこう好き、という人は圧倒的に女性が多いように思う。男性読者をターゲットにしたユニットの本がないのは、そのためだろうか。

以上の感想は、さほど多くはない経験に基づくものなので、今後見方も変化するかもしれない。はたしてこのような傾向があるのかどうか、あるのなら生物学的な差異なのか文化的なものなのか、興味を持って今、眺めているところである。

見ることができました。京都の上島様から4/21に電話を頂いたときにはまだ49号が届いていなかったのでびっくりいたしました。4/22には49号が朝に、夕方にはビデオが到着その日のうちにダビングして返送しました。上島様はお好み焼き屋をされているそうで、いつか訪ねてみたいと楽しみにしています。P.S. ビデオにはおしゃれ工房の他に、松尾氏の顔折り紙や折紙探偵団の巨大ティラノサウルス製作場面も入っていて二重の喜びです。(大阪・宮宗)

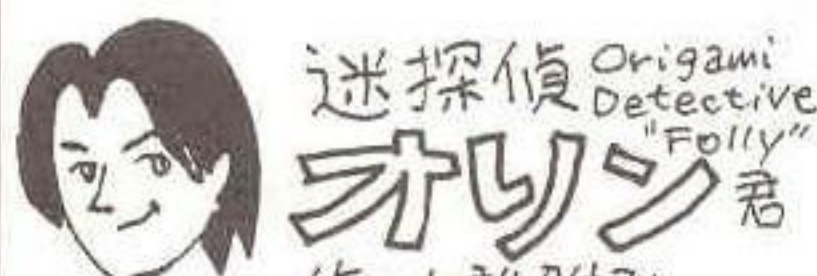
### ホームページ公開中

公開URLは、  
<http://www.ask.or.jp/~origami/t/> です。  
団員パスワードは、大文字/小文字区別して、Pyramid です。

### 折紙探偵団定期例会の

### お知らせ

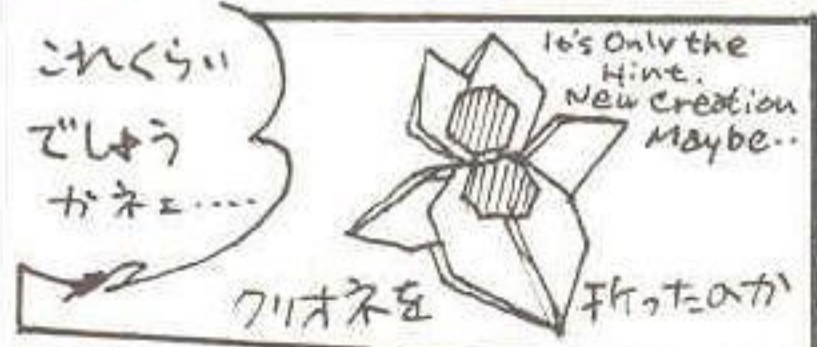
■7月4日(土) 文京区民センター 2時頃から。今回は、西川団長以下数名がニューヨーク行きのため、6月の例会が変更になりました。ご注意下さい。なお、コンベンション間近のため、準備の作業のための例会になります。手伝いの出来る方お待ちしております。



迷探偵 Origami Detective "Folly" 君

作: 山梨 雅弘

I Must Find Him  
折紙作家失踪事件の巻



定価 300 円

発行・折紙探偵団

〒113-0001  
東京都文京区白山1-33-8-216  
ギャラリーおりがみはうす内  
Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司  
編集人・岡村昌夫

## ● 求む、譲る

### 求む!

●ビバ! おりがみ 前川淳/作 笠原邦彦/編・著 ●トップおりがみ 高濱利恵/監修 笠原邦彦/著 共にサンリオ刊 多くの方が探し求めています。情報だけでもお待ちしています。

### 譲る!

ローバー・ミニ 1300  
故、吉野一生氏が乗っていた愛車ローバーミニを折り紙愛好家に譲ります

前号で希望者を捜しましたが、問い合わせがありませんでした、引き続き希望者を募集します。連絡はおりがみはうす 03-5684-6040 山口まで。

### ありがとうございました!

●49号の「求む」欄で探していた、「第1回世界折紙展出品記念バッジ」が手に入りました。京都の高木智さんからの提供です。なんでも、49号を読んでいた高木さんの奥さんが「あっ、これうちにある」と大声をあげたそうです。いやあ、探してみるもんですね。ありがとうございました。(東京・前川)

●49号にて私のお願いを取り上げていただき感謝しております。念願のビデオを